

泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ

泉南市文化財調査報告書 第三十四集

2001. 3

泉南市教育委員会

序 文

泉南市は、大阪府南部に位置し、北西を大阪湾、南東を和泉山脈に囲まれ、一年を通して温暖な気候条件を有する豊かな自然環境に恵まれています。このため、市内には先人たちによって残された数多くの遺跡が存在しています。

近年の関西国際空港の開港及びそれらに伴う周辺の様々な開発等による著しい都市化によって、私たちを取りまく生活環境は大きく変化しつつあります。しかしその一方でこれらの貴重な歴史遺産が破壊の危機にさらされていることも事実です。

このような状況のもとで、本市ではこれらを保護し未来に伝えていくという重要な責務を果たすため、緊急発掘調査を随時おこなっており、その成果を公表すべく『泉南市遺跡群発掘調査報告書』を毎年刊行させて頂いております。

本書によって、最新の調査データを知って頂き、本市のもつ豊かな歴史情報の一端に触れて頂ければ幸いです。

本市と致しましては、新たなる世紀を迎え、今後ともより一層の充実した文化財行政をおすすめていく所存です。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年3月

泉南市教育委員会
教育長 亀田章道

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成12年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎、岡田直樹、石橋広和、岡 一彦、城野博文、河田泰之、大野路彦を担当者とし、また事務担当者を西澤順也として、平成12年4月1日に着手し、平成13年3月31日に終了した。
3. 調査および整理の実施にあたっては、蔵田弘幸、蒲生徹幸をはじめ、伊藤由紀、江尻美代子、片木直幸、田上真理、富 愛、福井元気、藤野 渉、真鍋紀美子、向林智与諸君らの協力を得た。
また、大野薫氏から有益な助言、協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は、石橋、岡、城野、河田がおこなった。執筆の分担は目次に記した。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者がおこない、出土遺物の写真撮影は城野、河田がおこなった。
6. 遺物実測は、真鍋紀美子がおこない、トレースは、富 愛が行なった。図版・挿図作成は、伊藤由紀、富、真鍋がおこなった。
7. 本書の編集は河田が中心となりおこなったが、一部仮屋、石橋、岡が補佐した。
8. 調査にあたっては、写真、スライド等を作成した。ひろく利用されることを望むものである。
9. 調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。ひろく利用されることを望むものである。

凡 例

1. 各調査区には、個別の番号をつけている。番号の基本構成は、「遺跡略称（記号）—年度—通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡—O N、幡代遺跡—H T、岡中遺跡—O K、北野遺跡—K T、仏性寺跡—B S、氏の松遺跡—U J、岡田遺跡—O K D、下村遺跡—S M、フキアゲ山東遺跡—F K E、中小路西遺跡—N K W、坊主池遺跡—B Z、新家オドリ山南遺跡—O D Sである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現している。
なお本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は、P L. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標VI系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北を表している。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。
4. 遺構名称は、アルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットは、S D—溝、S K—土坑、S X—性格不明遺構、Pit—柱穴をそれぞれ表す。遺構番号は、2桁を原則として1桁の数字の場合は、その前に0を付している。また、調査区毎に遺構の種類別に通し番号を付している。
5. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、弥生土器・土師器・土製品—白抜き、瓦—斜線のように塗り分けた。
6. 出土遺物の番号は、遺跡毎に土器、瓦の区別無しに通し番号を付した。なお、遺物実測図および挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。また、同一写真図版内で複数の遺跡の遺物が存在する場合、番号の前に遺跡の略称を付している。
7. 遺物の出土量を表すのに用いたコンテナは、容積約27.5 lのものである。

目 次

第1章 調査の経過	(岡)	1
第2章 男里遺跡の調査		6
第1節 既往の調査	(河田)	6
第2節 00—1区の調査	(城野)	8
第3節 00—2区の調査	(河田)	9
第4節 00—3区の調査	(河田)	9
第5節 00—4区の調査	(城野)	10
第6節 00—5区の調査	(河田)	11
第7節 00—6区の調査	(石橋)	11
第8節 00—7区の調査	(城野)	12
第9節 00—8区の調査	(石橋)	13
第10節 99—9区の調査	(城野)	14
第11節 99—10区の調査	(石橋)	15
第3章 幡代遺跡の調査		17
第1節 既往の調査	(河田)	17
第2節 99—1区の調査	(城野)	17
第4章 岡中遺跡の調査		19
第1節 既往の調査	(河田)	19
第2節 00—1区の調査	(城野)	19
第5章 北野遺跡の調査	(河田)	21
第1節 既往の調査		21
第2節 00—1区の調査		21
第6章 仏性寺跡の調査		23
第1節 既往の調査	(河田)	23
第2節 00—1区の調査	(城野)	23
第7章 氏の松遺跡の調査		25
第1節 既往の調査	(河田)	25
第2節 99—1区の調査	(石橋)	26
第8章 岡田遺跡の調査		27
第1節 既往の調査	(河田)	27
第2節 00—1区の調査	(河田)	27
第3節 00—2区の調査	(岡)	28
第4節 99—5区の調査	(石橋)	28
第5節 99—6区の調査	(城野)	29
第9章 下村遺跡の調査	(河田)	30

第1節 既往の調査	30
第2節 00—1区の調査	30
第10章 フキアゲ山東遺跡の調査 (河田)	32
第1節 既往の調査	32
第2節 00—1区の調査	32
第11章 まとめ (河田)	34
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 男里遺跡調査区位置図	7
第2図 男里遺跡00—1・4区地形図	8
第3図 男里遺跡00—1区出土の遺物	9
第4図 男里遺跡00—2区、99—9区地形図	9
第5図 男里遺跡00—3区地形図	10
第6図 男里遺跡00—5・6区地形図	11
第7図 男里遺跡00—7区地形図	12
第8図 男里遺跡00—8区、99—10区地形図	13
第9図 男里遺跡00—8区の遺構平・断面図	14
第10図 男里遺跡00—8区出土の遺物	14
第11図 男里遺跡99—9区出土の遺物	15
第12図 幡代遺跡調査区位置図	17
第13図 幡代遺跡99—1区地形図	18
第14図 岡中遺跡調査区位置図	19
第15図 岡中遺跡00—1区地形図	20
第16図 北野遺跡調査区位置図	21
第17図 北野遺跡00—1区地形図	21
第18図 仏性寺跡00—1区地形図	23
第19図 仏性寺跡・坊主池遺跡・中小路西遺跡調査区位置図	24
第20図 岡田遺跡・氏の松遺跡調査区位置図	25
第21図 氏の松遺跡99—1区地形図	26
第22図 岡田遺跡00—1区、99—5区地形図	27
第23図 岡田遺跡00—2区地形図	28
第24図 岡田遺跡99—6区地形図	29
第25図 下村遺跡調査区位置図	30
第26図 下村遺跡00—1区地形図	31

第27図	フキアゲ山東遺跡00—1区地形図	32
第28図	フキアゲ山東遺跡・新家オドリ山南遺跡調査区位置図	33

表 目 次

第1表	平成12年度発掘および試掘調査届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	38

図 版 目 次

P L . 1	泉南地域の文化財
P L . 2	泉南地域の地形分類
P L . 3	男里遺跡調査区①
P L . 4	男里遺跡②・幡代遺跡・岡中遺跡・北野遺跡・仏性寺跡調査区
P L . 5	氏の松遺跡・岡田遺跡・下村遺跡・フキアゲ山東遺跡調査区
P L . 6	男里遺跡00—1・2区
P L . 7	男里遺跡00—3・4・5区
P L . 8	男里遺跡00—6・7区
P L . 9	男里遺跡00—8区、99—9区
P L . 10	男里遺跡99—10区・幡代遺跡99—1区・岡中遺跡00—1区
P L . 11	北野遺跡99—1区・仏性寺跡00—1区・氏の松遺跡00—1区
P L . 12	岡田遺跡00—1・2区、99—5区
P L . 13	岡田遺跡99—6区・下村遺跡00—1区・フキアゲ山東遺跡00—1区
P L . 14	男里遺跡00—1・8区、99—9区出土の遺物

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVIII

第1章 調査の経過

バブル景気や関西国際空港に関連する開発に伴い、年々増加していった市内の発掘届出件数は、ここ数年にわたってやや頭打ちの傾向にあり、今年度においては昨年に引き続き前年に比べて減少する結果となった。これらには長期化する経済の停滞に起因する開発や空港関連事業および個人住宅の建て替えの減少など様々な要因が考えられる。しかし、現在では関西国際空港の2期工事も本格化し、今後空港関連の開発が再び増加に転じることも否定できない状況にある。

このような状況下、今年度本市において第2表のとりの発掘調査がおこなわれた。このうち本書の本文中において報告する遺跡数は9遺跡、調査件数は昨年度の未報告分を含めて21件である。毎年の傾向であるが、今年度も大部分を小規模な調査が占める結果となっている。

以下、それぞれの遺跡について調査の経過をみてみたい。

男里遺跡は、泉南市域における遺跡の中で最大の規模をもつ遺跡で、泉南市を代表する遺跡のひとつである。毎年小規模な調査が数多くおこなわれ、着実にデータの蓄積がなされてきた。近年、府道新設に伴う大規模な調査が遺跡を縦断する形でおこなわれ、新たな資料が増加している。本書では昨年度の未報告分を合わせて10件の調査を報告している。

幡代遺跡は、現在の幡代集落を中心とした遺跡である。古くから周知されていた遺跡のひとつで、男里遺跡と同様に小規模な調査が中心におこなわれてきた。今年度は調査はおこなわれなかったが、昨年度未報告分の1件の調査を収録している。

岡中遺跡も古くから周知されていた遺跡のひとつである。今年度は遺跡の南端部において1件の調査がおこなわれた。

北野遺跡は、過去はそれほど調査件数は多くはないものの、近年比較的大規模な調査などがおこなわれており、今後調査が増加する傾向が窺える。今年度は遺跡の南東部の地点でおこなわれた1件の調査を報告している。

仏性寺跡の調査も数は多くはないが、過去の調査において、中世の瓦や寺院関連の整地層などが確認されている。今年度は遺跡のほぼ中央部で1件の調査がおこなわれた。

氏の松遺跡では、市道新設に伴う調査において、弥生時代前期の集落が確認されている。本書では市道に隣接した地点でおこなわれた昨年度未報告分の調査を1件報告している。

岡田遺跡は、男里遺跡に次ぐ規模、調査件数を誇る遺跡である。発見以来ほぼ毎年調査がおこなわれ、特に近年では遺跡の北東部および北西部を中心に調査の増加が著しい。今年度は2件の調査がおこなわれ、本書では昨年度の未報告分を合わせて4件の調査を報告している。

下村遺跡は、これまで2件の調査を数えるに過ぎないが、弥生・中世・近世および近代にわたる幅広い時期の遺構遺物が確認されており、新家川流域の歴史を考える上で欠くことのできない遺跡のひとつといえる。今年度は遺跡の中央部において1件の調査がおこなわれた。

フキアゲ山東遺跡は、遺跡内に2基の古墳が確認されており、その内の1基が調査されているのみで、遺跡の大部分はすでに宅地として開発されており、遺跡の具体的な内容は把握されていないのが現状である。今年度は1件の調査がおこなわれた。

第1表 平成12年度発掘および試掘調査届出一覧表

平成12年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積(m ²)	件 数	面積(m ²)	件 数	面積(m ²)
12年・1	2	852.45	2	1,734.53	4	2,586.98
2	2	1,388.45	5	6,713.95	7	8,102.40
3	4	1,250.22	1	1,672.44	5	2,922.66
4	2	770.58	4	18,207.585	6	18,978.165
5	2	1,927.27	4	5,822.23	6	7,749.50
6	3	3,408.15	1	837.48	4	4,245.63
7	1	376.20	7	9,145.29	8	9,521.49
8	4	3,180.43	4	8,958.77	8	12,139.20
9	3	1,887.90	3	4,233.10	6	6,121.00
10	4	3,485.09	2	2,498.76	6	5,983.85
11	2	357.74	2	921.69	4	1,279.43
12	8	2,120.80	0	0.00	8	2,120.80
合 計	37	21,005.28	35	60,745.825	72	81,751.105

第2表 発掘調査一覧表

平成12年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月	備 考
1	男里遺跡	00-1区	男里		301.74	分譲住宅	12年11月	本書掲載
2	男里遺跡	00-2区	男里		146.09	個人住宅	12年8月	同上
3	男里遺跡	00-3区	男里		166.37	個人住宅	12年8月	同上
4	男里遺跡	00-4区	男里		399.00	個人住宅	12年5月	同上
5	男里遺跡	00-5区	男里		166.77	倉庫・事務所 付専用住宅	12年8月	同上
6	男里遺跡	00-6区	男里		1,111.45	宅地造成	12年4月	同上
7	男里遺跡	00-7区	男里		1,492.00	分譲住宅	12年9月	同上
8	男里遺跡	00-8区	男里		331.66	個人住宅	12年4月	同上
9	男里遺跡	00-9区	男里		100.00	道路	12年7月	別書掲載
10	男里遺跡	99-7区	男里		130.00	農業関連	11年11月 ～12年1月	同上
11	男里遺跡	99-8区	男里		409.00	道路	11年11月 ～12年3月	同上
12	男里遺跡	99-9区	男里		277.00	個人住宅	12年2月	本書掲載
13	男里遺跡	99-10区	男里		156.57	個人住宅	12年3月	同上
14	幡代遺跡	99-1区	幡代		246.72	個人住宅	12年3月	同上
15	岡中遺跡	00-1区	信達岡中		515.27	農業用倉庫	12年4月	同上
16	北野遺跡	00-1区	信達大苗代		482.51	個人住宅	12年10月	同上
17	仏性寺跡	00-1区	信達市場		247.96	個人住宅	12年6月	同上
18	坊主池遺跡	00-1区	信達市場		1,679.31	宅地造成	12年6月	トレンチ1ヶ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。(第19図)
19	坊主池遺跡	99-1区	信達市場		557.47	長屋住宅	12年2月	トレンチ1ヶ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。(第19図)
20	中小路西遺跡	00-1区	信達市場		1,940.50	分譲住宅	12年7月	トレンチ2ヶ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。(第19図)
21	氏の松遺跡	99-1区	岡田		419.00	個人住宅	12年3月	本書掲載
22	岡田遺跡	00-1区	岡田		110.29	個人住宅	12年12月	同上
23	岡田遺跡	00-2区	岡田		497.85	分譲住宅	12年12月	同上
24	岡田遺跡	99-5区	岡田		445.52	個人住宅	12年1月	同上
25	岡田遺跡	99-6区	岡田		433.45	個人住宅	12年2月	同上
26	下村遺跡	00-1区	新家		376.20	個人住宅	12年10月	同上
27	フキアゲ山東遺跡	00-1区	鬼田		165.90	個人住宅	12年11月	同上
28	新家オドリ山南遺跡	00-1区	新家		1,660.75	介護センター	12年10月	トレンチ1ヶ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。(第28図)

第3表 試掘調査一覧表

平成12年12月31日現在

No.	遺跡名	位 置	申請者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	範囲外	信達市場		56,220.56	宗教施設 付属建物	12年1月27日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	樽井		5,072.43	診療所	12年1月31日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	樽井		359.28	分譲住宅	12年2月3日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	新家		2,160.39	特別養護 老人ホーム	12年2月7日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	信達市場		349.36	分譲住宅	12年2月29日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	信達牧野		1,672.44	分譲住宅	12年3月29日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	新家		1,717.00	分譲住宅	12年4月18日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	信達牧野		2,157.34	分譲住宅	12年4月19日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	信達岡中		1,339.25	倉庫	12年5月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	男里		610.98	ドライブイン レストラン	12年5月18日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	新家		14,734.456	病院増設	12年5月19日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	新家		958.96	葬儀場	12年5月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	信達		2,731.71	宅地開発	12年5月31日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	信達大苗代		1,299.39	分譲住宅	12年6月13日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	信達六尾		433.00	老人ホーム	12年7月14日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	信達大苗代		2,925.02	分譲住宅	12年7月18日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	信達大苗代		321.28	宅地分譲	12年7月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	新家		1,055.29	宅地造成	12年9月4日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	信達市場		1,011.48	分譲住宅	12年9月19日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	樽井		480.00	長屋住宅	12年9月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	信達大苗代		2,135.10	分譲住宅	12年10月3日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	樽井		1,086.52	集会所	12年10月12日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	樽井		1,531.56	分譲住宅	12年10月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
24	範囲外	信達市場		4,992.19	分譲住宅	12年11月7日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
25	範囲外	幡代		634.88	工場及び事務所	12年11月8日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
26	範囲外	新家		1,049.98	宅地造成	12年11月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
27	範囲外	信達牧野		1,448.78	宅地造成	12年12月11日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成12年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	申請者	面積(m ²)	用途	調査年月日	備考
1	男里遺跡	男里		46.00	水路	12年1月11日～12日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	岡田西遺跡	岡田		11.93	下水道	12年1月17日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	戎畑遺跡	横井		59.00	下水道	12年1月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	新家古墳群	新家		274.47	住宅新築	12年1月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	男里遺跡 光平寺跡	男里		38.90	下水道	12年2月4日～3月10日	一部で数層の遺構面を確認した。
6	岡田西遺跡	岡田		98.00	農業関連	12年2月10日～14日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	池尻遺跡	新家		150.00	農業関連	12年2月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	男里遺跡	男里		132.570	個人住宅	12年9月1日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	芦谷池	信達市場		230.000	農業関連	12年11月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	根束街道	信達童子畑		56.000	農業関連	12年12月5日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	岡田西遺跡	岡田		56.000	農業関連	12年12月27日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第1図）

男里遺跡は、市域の西端を画する男里川右岸に位置する。現在、遺跡の西側に男里集落が、東側に馬場集落が位置し、その間は耕作地として利用されている。現在の土地利用に即して遺跡内の地形分類をみると、男里集落は自然堤防上に、馬場集落は沖積段丘上にそれぞれ位置し、両集落間にひろがる耕作地には氾濫原及び谷底低地がひろがり、その中心部分にあたる双子池にはほぼ重なるように旧河道が南北にみられる。各時代における集落跡の分布は、基本的には旧河道の兩岸に位置する沖積段丘および自然堤防を中心としている。

以下に既往の発掘調査の成果を時代ごとにみていくこととする。

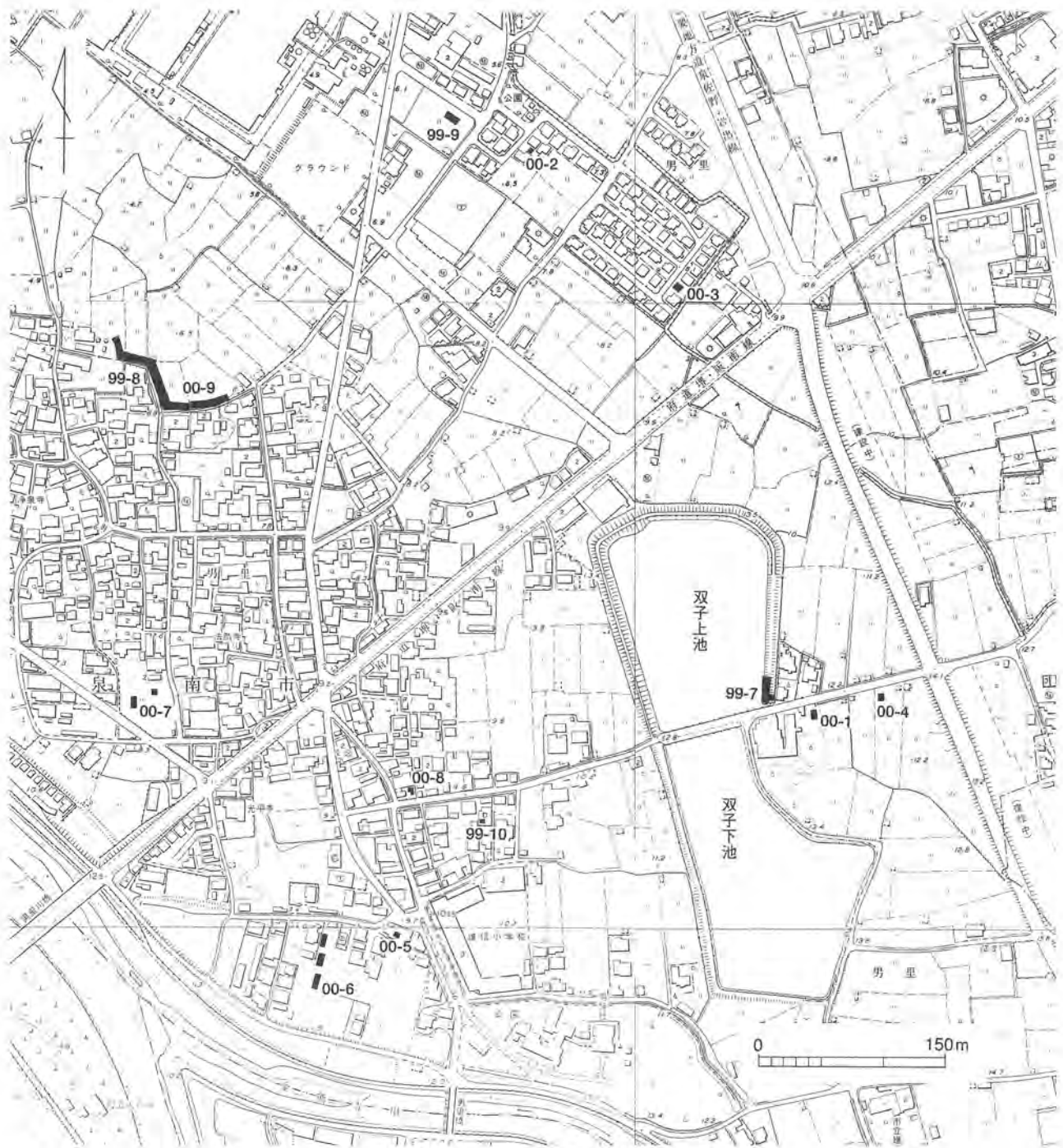
旧石器時代では、遺構に伴うものではないが双子池下池で採集されたナイフ形石器があげられる^①。なお、遺跡の南約4kmに位置する滑瀬遺跡でもナイフ形石器が確認されている^②。

縄紋時代では、晩期の遺構および遺物が確認されている。遺跡の北西部、地形分類では旧河道および氾濫原及び谷底低地に位置する地点で、柱穴等の遺構と当該時期の包含層^③、旧流路^④や埋積谷^⑤の埋土から突帯紋土器がみついている。特筆すべき遺物として、95—1区の調査では浮線紋土器が^⑥、00—9区の調査では石棒が確認されている^⑦。縄紋時代においては晩期以前における様相の解明と、晩期の集落域の限定が今後の課題であろう。

遺跡北西部において弥生時代前期の遺物が確認されている^⑧。弥生時代中期前半では、遺跡北西の男里集落の北東端において埋積谷の埋土から遺物が^⑨、中期後半では遺跡北西部の馬場集落の南側において集落および木棺墓などが確認されている^⑩。弥生時代中期末から後期前半の遺構および遺物は現在のところ確認されていない。遺跡中央の双子池周辺において弥生時代終末期の遺物が旧河道の埋土から確認されている^⑪。このうち1995年度の大阪府教育委員会による調査では、庄内甕が確認されている。以上、弥生時代においては、弥生時代中期の集落域はほぼ特定できるものの、前期および後期における様相はよくわかっていない。また弥生時代全般における水田などの生産域も確認されておらず、その存在が想定される、遺跡中央部の氾濫原及び谷底低地における今後の調査が注目される。

古墳時代初頭の遺物が双子池周辺で旧河道の埋土から確認されている^⑫。この時期の遺物は弥生時代終末期の遺物とともに確認される例が多い。古墳時代中期では、遺跡北部において氾濫作用による堆積層から遺物が確認されている^⑬。古墳時代後期では、堅穴住居が遺跡の北東部^⑭で、遺跡の北部で溝が確認されている^⑮。そのほか遺跡北部で小石室が確認されている^⑯。以上、古墳時代においては、前期から中期における様相がほとんどわかっていないのが現状である。やや視野をひろげると、泉南地域、とくに貝塚市以南において現在確認されている集落遺跡は、弥生時代においては各河川単位で存在するものの、古墳時代前期および中期になるとその数が減ずる傾向にある。この時期、集落自体が減ずるのか、それとも今だ確認されていないだけなのか、資料の蓄積が待たれる。

飛鳥時代から奈良時代では、遺跡南東の馬場集落の西側において堅穴住居や掘立柱建物、土坑が確認、されているほか^⑰、男里集落の東側においても掘立柱建物^⑱や旧河道^⑲、しがらみ状遺構^⑳が確認されている。旧河道およびしがらみ状遺構を確認した大阪府教育委員会による調査のうち、1995年度の調査では墨書



第1図 男里遺跡調査区位置図

土器や土馬のほか、盤などの木製品や建築部材が、1996年度の調査では当該時期の製塩土器がほぼ完形で検出されている。

平安時代のものとしては、北東部および西部において掘立柱建物が確認されている²¹⁾。中世になると、現在の男里集落西側で鎌倉時代の掘立柱建物が確認されているほか²²⁾、現在の男里集落周辺において柱穴が散見される。また、現在耕作地として利用されている地点での調査では、中世の遺構は耕作痕が検出されることがほとんどである²³⁾。灌漑施設と考えられるものとしては、遺跡北部と北東に隣接する戎畑遺跡で溝が確認されている²⁴⁾。また、泉州各地の遺跡において平安時代以降中世における特徴的な遺物としてマダコ壺があげられるが、男里遺跡では初源期のものが確認されている²⁵⁾。

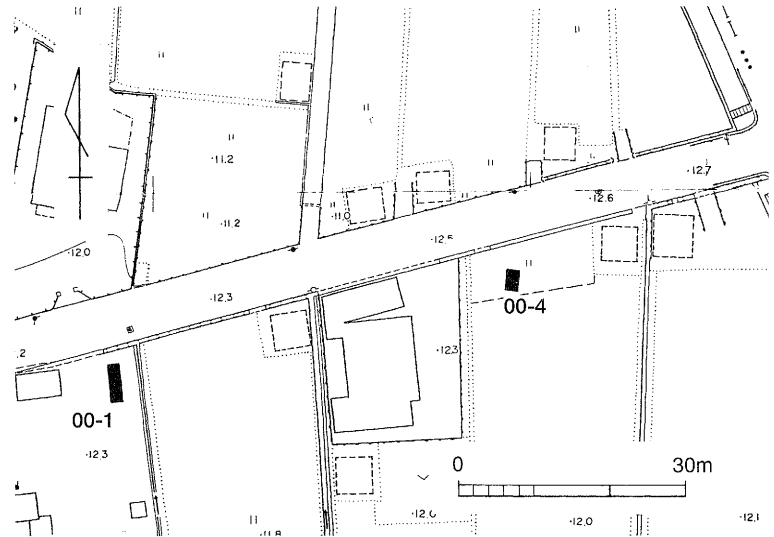
近世においては、中世の段階で形成された景観を踏襲しているようである。特筆すべき遺物として、近世後半のものと考えられる製糖に使用する「瓦漏」と考えられる遺物が確認されている²⁶⁾。

第2節 00—1区の調査

1. 位置 (第1・2図)

調査地は遺跡の中央部に位置する双子池より東へ約50mの地点であり、双子池を上池と下池とに分ち、さらに現在の男里集落と馬場集落とを結ぶ所謂「信長街道」の南に面している。地形分類上は男里川旧河道によって形成された氾濫原及び谷底低地に属するが、近年増加傾向にある周辺の調査においては安定した地山の存在も確認されている²⁷⁾。

調査区の現況は更地であり、全体に盛土が施されている。トレンチは1カ所設定した。



第2図 男里遺跡00—1・4区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3・6)

厚さ約40cmの盛土を除去すると、近現代の耕作土および床土である灰色シルト(約10cm)、暗橙色混じり淡灰褐色砂質土(約10cm)、淡灰褐色混じり橙色砂質土(約10cm)の各層がそれぞれ水平に堆積している。さらに暗褐色混じり淡褐色土(約40cm)、暗褐色粘質土(約30cm)が認められ、暗黄褐色粘質土の地山へといたる。このうち暗褐色混じり淡褐色土は旧耕作土または耕作に伴う客土と捉えられるものである。また暗褐色粘質土層は男里遺跡周辺においてひろく分布することが知られているものである。中から土師器の細片が僅かに出土した。また確認された地山はトレンチの南側ではクサリ礫を多く含み若干不安定な様相をみせるが、概ね平坦であり、上面の標高は11.0m前後を測る。地山上面において遺構が確認された。

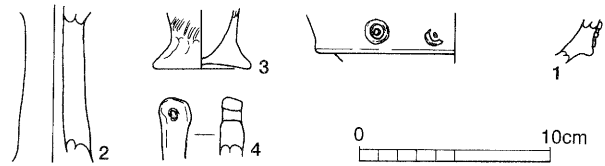
3. 遺構 (P L. 3・6)

確認された遺構は落ち込みおよびピットである。落ち込みはトレンチの中央部から北東端部において確認された。検出長2.1m、幅0.3~0.7m、確認面からの深さ0.2mを測る。主軸を北方向に向けた蛇行する溝状を呈し、北半部が直線的に伸びるのに対し、南半部では南東方向に緩やかに屈曲する。断面形状は西から東へと落ちる浅い碗型を呈するものと考えられ、同時に南から北へむかっても緩やかに窪んでいる。埋土は基本的には1層で、淡暗褐色粘質土を基本とするが、遺構の南端から中央にかけては下位に礫を多く含んでいる。埋土から土師器がまとまって出土した。

ピットは落ち込みの中央部西側に近接して確認された。直径18cm、確認面からの深さ2cmを測る、ややびつな円形を呈する。埋土は1層で、淡暗褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

4. 遺物 (P.L. 14、第3図)

落ち込みからはコンテナ1/2箱分程度の土師器が出土したが、いずれも細片であったため、図示可能であったのは以下の4点に限られた。1は加飾壺である。端部及び頸部以下を失う。内外面ともにミガキによって仕上げられるが、単位等



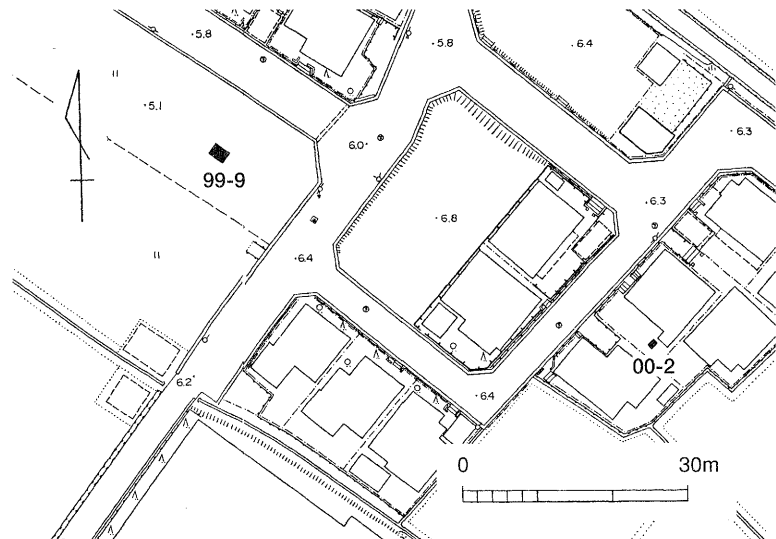
第3図 男里遺跡00—1区出土の遺物

は明瞭でない。外面には円形浮文が付加される。2は中空の高坏脚部である。3は製塩土器の脚台である。外面には僅かにタタキの痕跡を残す。4は土錘である。一方の端部を失うが、平板な棒の端部を指頭状に膨らませたもので、端部中央には穿孔が加えられる。

第3節 00—2区の調査

1. 位置 (第1・4図)

調査区は、男里遺跡の北部にあたり、地形分類では谷底低地及び氾濫原にあたる。周辺の調査では、旧男里川の氾濫原が確認されている^㊸。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第4図 男里遺跡00—2区、99—9区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 3・6)

盛土である表土 (1層・約10cm) を除去すると、旧耕作土と考えられる暗灰色シルト (2層・約25cm)、床土と考えられる黄灰色シルト

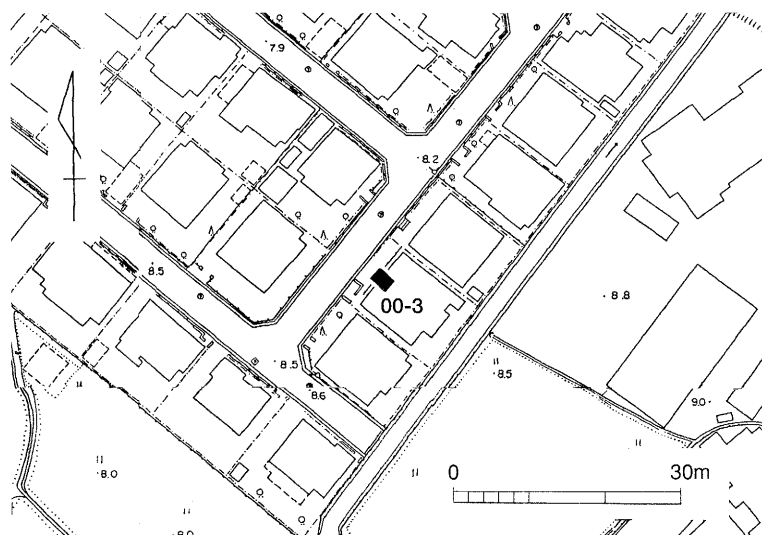
(3層・約40cm)、灰褐色シルト (4層)、にいたる。このうち4層は、無遺物層ではないと考えられたが、掘削が困難な為これより下層の状況については確認できなかった。このうち、4層上面で遺構検出をおこなったが、遺構は確認されず、いずれの層からも遺物の出土はなかった。

第4節 00—3区の調査

1. 位置 (第1・5図)

調査区は、男里遺跡の北部で地形分類では氾濫原及び谷底低地にあたる。周辺の調査では、南東側約

100mの地点で中世の掘立柱建物や耕作痕²⁹、南西約50mの地点で縄紋時代晩期の掘立柱建物や河道が確認されている³⁰。今回の調査区では、男里川の旧河道もしくは、右岸微高地にひろがる遺構が確認される可能性が想定された。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第5図 男里遺跡00—3区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 3・7)

盛土(1層・約140cm)を除去すると、旧耕作土と考えられる暗灰色シルト

(2層・約10cm)、明褐色シルト(3層・約10cm)、茶褐色シルト(4層・約25cm)、灰色粗砂混じり礫(5層・40cm～)にいたる。このうち、2・3層は旧耕地、5層は河川の氾濫による堆積と考えられる。

3・4層から、土師質土器片が出土した。細片のため年代は不明ではあるが、周辺の調査でこれに対応する層位が中世以降のものであることが確認されており、3層は中世の包含層の可能性が考えられる。なお、3・4層上面で遺構検出をおこなったが、遺構は確認されなかった。

第5節 00—4区の調査

1. 位置(第1・4図)

調査区は遺跡の中央部、双子池より東へ約100mの地点であり、00-1区の更に50m東側に位置している。地形分類上は氾濫原及び谷底低地に属している。調査区の現況は休耕地であった。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況(P.L. 3・7)

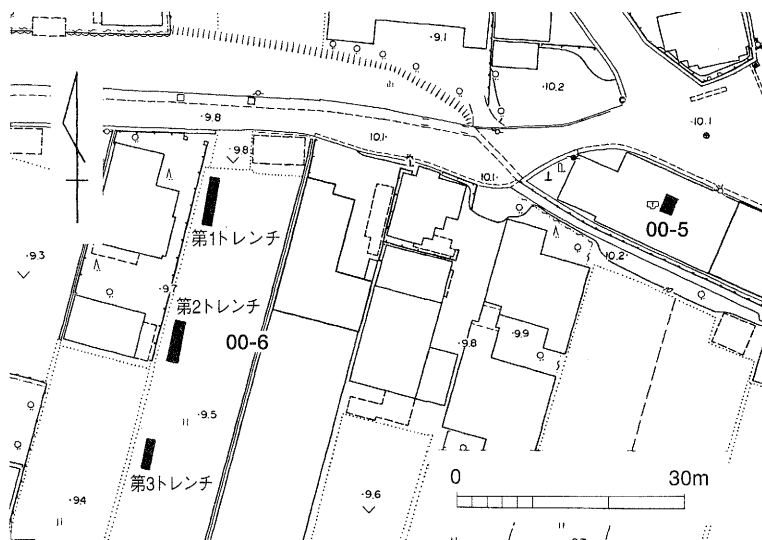
現代の滋味土である灰黒色土(約10cm)と床土である暗橙色混じり淡灰褐色砂質土(約40cm)および暗褐色混じり淡灰褐色砂質土(約10cm)を除去すると、淡灰褐色混じり暗褐色砂質シルト(約10cm)が露呈し、さらに暗褐色礫混じりシルト(約20cm)、にぶい暗黄褐色礫混じり土(50cm～)へと続く。地山は確認されなかった。

これらのうち暗褐色礫混じりシルト以下には多量のクサリ礫が含まれ、非常に不安定な状況を示していることから、河川の堆積作用によって形成されたものであると考えられる。また細片のため図示できなかったが、淡灰褐色混じり暗褐色砂質シルトと暗褐色礫混じりシルトからはともに古代の所産となる土師器や須恵器が極少量出土している。

第6節 00—5区の調査

1. 位置 (第1・5図)

調査区は、遺跡の西部で現在の男里集落の南西のはずれに位置し、地形分類では氾濫原及び谷底低地にあたる。調査区の南東には、式内社である男神社が位置する。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第6図 男里遺跡00—5・6区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 3・7)

表土 (1層・約50cm) を除去すると、黒褐色シルト (2層・約20cm)、マンガン混じり黄灰褐色シルト (3層・約10cm)、直径10~20cm程の礫

混じり灰色シルト (4層・約50cm)、褐灰色シルト (5層・約15cm) と続き、直径10~15cm程の礫混じり灰色シルトにいたる。2・3層は、旧耕作土と床土で、4層からは直径10~20cm程の礫と共に近代の陶磁器片や瓦が多量にみられることから整地等の人為的な堆積と考えられる。5層以下は自然堆積と考えられ、6層は礫を主体に構成されていることから、調査区の西側に位置する男里川の急激な氾濫による堆積と考えられる。このうち、3・5・6層の上面で遺構検出をおこなったが、いずれも遺構は確認されなかった。また、自然堆積と考えられる5層以下では遺物は出土しなかった。

第7節 00—6区の調査

1. 位置 (第1・6図)

調査地は、北側を光平寺推定城南限の道路と接し、南側を山中川と合流直前の金熊寺川北側堤防と接し、近世~近代においては「霞堤」と呼ばれる堤が存在した地点にもあたる。付近では住宅開発を中心に小規模な調査が多く行われており、最も近接する北方約20mの98—2区の調査^⑪では、礫層のほか霞堤と考えられる整地層も確認されており、本調査においても霞堤のひろがり注目された。地形的には、男里川から金熊寺川の自然堤防もしくは氾濫原上に立地するものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 3・8)

トレンチは3カ所設定した。第1トレンチは最も北側に位置する。滋味土 (約15cm) を除去すると、明褐色砂質シルト (約30cm)、褐色粘性シルト (約20cm)、トレンチ北方では拳大の円礫を大量に含んだ明褐色粘性シルト (約20cm) 等の水田造成の為の整地状土層が介在し、かなり密度の低い暗褐色粗砂 (約50cm) の下層には、かなり締まった褐色礫にいたる。また、トレンチ北の一部では、褐色礫層面

の直上に明褐色粘土（約5cm）が確認された。

第2トレンチは、中央に位置する。第1トレンチとほぼ同様の層位を示す。滋味土（約20cm）、赤褐色シルトの床土（約5cm）、整地状の明褐色砂質シルト（約35cm）の下層には河川性の堆積と考えられる褐色礫（約45cm）、トレンチ南部には褐色粗砂（約10cm）が確認され、地山と考えられる暗褐色礫の直上には明褐色粘土（約5cm）が認められた。

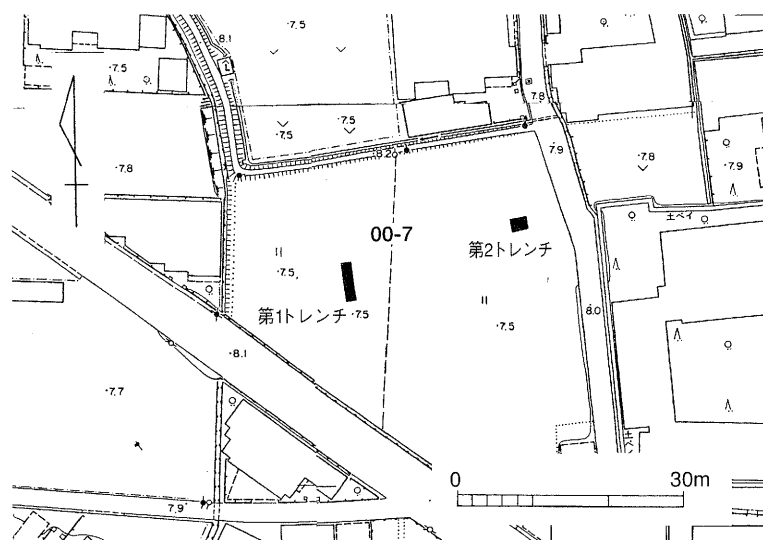
第3トレンチは、最も南側に位置する。滋味土（約15cm）、赤褐色シルトの床土（約5cm）を除去すると、整地状の明褐色砂質シルト（約35cm）と北部に礫を多く含んだ明褐色砂質シルト（約20cm）が認められ、1・2トレンチ同様に暗褐色の礫層が確認された。

遺構、遺物はいずれのトレンチからも確認されなかった。

第8節 00—7区の調査

1. 位置（第1・7図）

調査区は府道堺阪南線「男里川」交差点を北西へ約60m進んだ地点である。遺跡の西端部にあたり、現行の遺跡分布図においては光平寺跡の北西隅部にも一部が重なっている。地形分類上は男里川右岸に発達する氾濫原及び谷底低地に属している。現況では二枚に分かれる耕地であり、トレンチは一枚につき1カ所ずつ設定した。西側から第1トレンチ、東側のを第2トレンチと呼称する。



第7図 男里遺跡00—7区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 4・8）

両トレンチ間では様相がかなり異なる。まず第1トレンチでは現代の滋味土である淡灰色土（約10cm）および、床土である褐灰白色土（約10cm）、淡黄灰褐色土（約20cm）を除去すると褐色混じり淡灰褐色砂質土（約20～40cm）が認められる。この層は非常に均質であり、遺物も全く含まないことから、耕地造成に伴う整地層と捉えることができるものである。さらに淡褐色礫混じり土（約20cm）および淡暗黄褐色砂（約10～40cm）があるが、これらはいずれも全域にみられるものではなく、厚薄があり起伏に富んだ非常に不安定な堆積をみせている。以下に地山と捉えられる暗褐色礫混じり土がひろがっている。地山もまた起伏を有し、大きくは北から南へと傾斜している。標高は6.6～7.0m前後を測る。遺構、遺物は確認されなかった。

第2トレンチでは現代の滋味土を除去すると、トレンチの西端部や東端部においては暗褐色ブロック混じり淡灰褐色土（約15cm）や橙色粘土混じり灰褐色シルト（約5cm）が認められるが、これらはいず

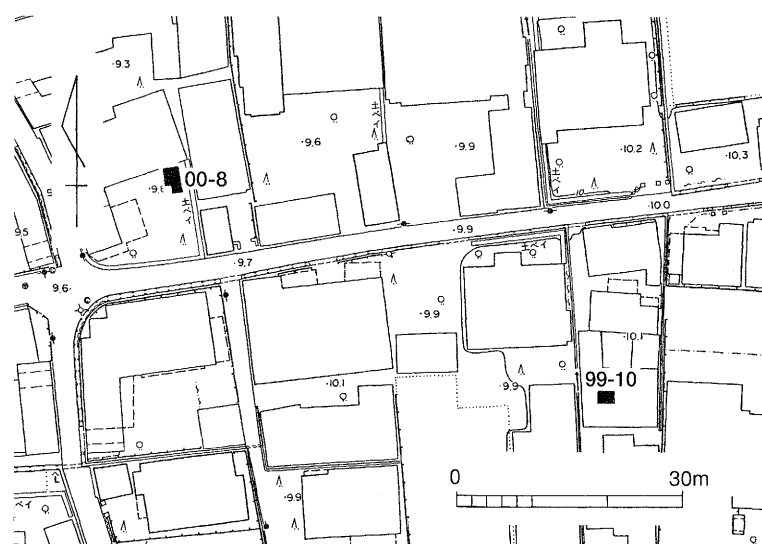
れも現代の床土や旧耕作土が攪拌されて形成されたものと捉えることができるものであり、その他の地点では滋味土直下に暗褐色砂礫からなる地山が露呈する。地山の状況は概ね平坦であり、標高は7.5m前後を測る。遺構、遺物は確認されなかった。

以上の成果から、第1トレンチでは地山直上には不安定な堆積をみせる砂礫層があり、さらにそれらを整地し、耕地としたことが明らかとなり、第2トレンチではかつて存在した旧耕作土や床土層はほぼ完全に削平されていることが確認された。互いに共通する地山上面の高さを比較すると第2トレンチの方が約50cm程高く、南西方向つまり現在の男里川に向かって緩やかに傾斜する旧地形であったことがわかる。

第9節 00—8区の調査

1. 位置 (第1・8図)

調査地は、現在の男里集落の南部分、双子池を上池と下池に分け男里集落内を通る所謂「信長街道」に比定されている道路の北に面する。地形的には、男里川右岸の沖積段丘面もしくは自然堤防上に立地しているものと考えられる。



第8図 男里遺跡00—8区、99—10地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 4・9)

表土(約20cm)下には、約30cmにわたって整地層と考えられる黒褐色系と黄褐色系の粘性シルトが互層

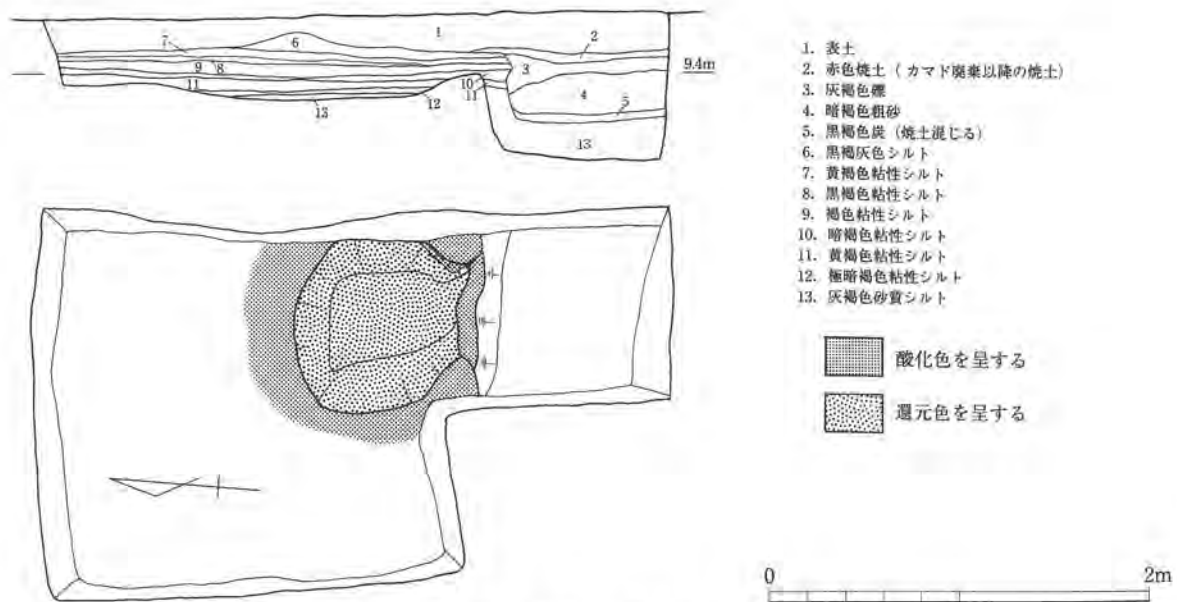
で版築状に数cm単位ずつの厚さで確認された。これらの下層には、灰褐色砂質シルトの面が確認された。近世のカマドによって東壁は約120cmにわたって赤色に変化しているが、カマド形成に伴う掘り方等は確認できず、整地状土層が焼けているだけであった。

一方、トレンチ南側拡張部分においては、表土直下からカマド形成に伴うと思われる整地状土層が約50cm、ほぼまっすぐに掘り込まれているのが確認された。掘り込み部分は、灰褐色礫(約20cm)や暗褐色粗砂(約10cm)等で人為的に埋め戻されており、最下層にはカマドから掻き出されたと考えられる炭層(約5cm)が認められた。

遺物は、整地状土層やカマド内部から近世～近代の陶磁器、瓦が出土している。

3. 遺構 (P.L. 4、第9図)

表土直下にカマドと考えられるものを1基検出した。検出されたのは本体底面部分だけで、上部構造はすでに失われていた。燃焼部分はややいびつな円形を呈し、検出長は南北88cm、東西90cmで中心に



第9図 男里遺跡00—8区の遺構平・断面図

むかって緩やかに落ち込む。全体に非常に硬く焼け締まり、部分的には還元される。さらにその周りは約30cmにわたり灰褐色砂質シルト面が赤色化しているのが確認された。南側の焚口は約50cmにわたって開口し、袖状の高まりが形成されている。さらに南側を約50cmほぼまっすぐに掘り込み、焚口から燃焼部を一段高く造り出している。掘り込まれた斜面部も赤色化している。

本カマドの築造過程は、東壁において燃焼部の掘り方が検出されなかったことから、焚口部分を掘り込んで低くした後、横穴状に円形に燃焼部を掘り込み形成したものと考えられる。

4. 遺物 (P L、14、第10図)

遺物は、ほとんどが瓦であり、カマド内部に詰め込まれるようにして出土している。5は軒平瓦である。文様は均整唐草文で、中心飾は丸みを帯びた花冠、萼で、端文様にはY字状若葉を配するが、瓦当部1/2は欠損している。全体に赤褐色を呈し、二次焼成を受けている。



第10図 男里遺跡00—8区出土の軒平瓦

第10節 99—9区の調査

1. 位置 (第1・4図)

調査区は遺跡の北縁部中央に位置し、府道金熊寺男里線「男里原田」交差点より約200m南西へ進んだ住宅地の中にある。地形分類上は双子池から北方に伸びるとされる男里川旧河道に属している。調査区の現況は休耕地であった。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L、4・9)

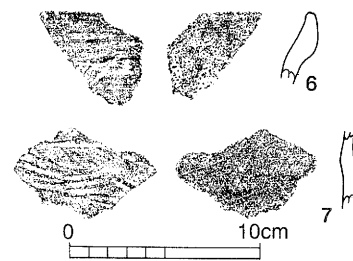
現代の滋味土を除去すると、床土である淡橙色混じり淡灰褐色土（約10cm）が現れ、さらに旧耕作土である黄色混じり淡灰褐色土（約20cm）、淡黄褐色粘質土（約15cm）、橙色混じり暗灰褐色シルト（約20～40cm）へと続く。ここまでは各層ともに水平堆積をみせており、耕作に伴って形成されたものと捉えることができる。このうち橙色混じり暗灰褐色シルトから中世の所産と目される土師器の極細片が出土した。

橙色混じり暗灰褐色シルトの下には、トレンチの南端1/3部分を除いて暗灰褐色混じり明黄色砂礫（約10～20cm）が現れる。この層は直径5cm大の砂岩礫からなる砂礫層であり、やや軟弱ながらも一見すると地山とも捉えられるものである。トレンチの南端部分ではこの層を切るように暗灰黒色粘土（約25cm）が堆積している。以下確認のため、トレンチの東半部を掘り下げたところ基本的には、暗淡灰褐色砂～砂質シルト（約10～20cm）、暗灰褐色砂礫（約10～20cm）、暗灰オリーブ色砂質シルト（30cm～）へと続いている。またこれらの間には部分的に橙色混じり明灰褐色砂（約10cm）、暗灰褐色混じり暗黄褐色砂（約10cm）、暗黄褐色砂礫（約20cm）が介在している。これらはいずれも河川性の堆積状況を示しており、中には多量の植物遺体を含む層もあった。特に暗淡灰褐色砂～砂質シルトからは多くの植物遺体と共に縄紋時代後期から晩期の所産となる遺物が少量出土している。

以上のことから本調査区が地形的に旧河道に属することは疑いなく、時期的にも縄紋晩期以降に埋没したものであることが確認された。

3. 遺物（P L. 14、第11図）

出土した遺物のうち、図示しえたものは次の2点のみであった。いずれも暗淡灰褐色砂～砂質シルトから出土したものである。6は浅鉢である。口縁部より下を欠く。端部を肥厚させるもので、外面には条痕が残る。復元口径18.2cmを測る。灰黄褐色を呈し、胎土には多量の砂粒を含む。7は体部のみであり詳細は明らかでないが、僅かに屈曲することから深鉢等の頸部付近であろう。外面全体に条痕が残る。外面には多量の煤が付着し、内面は暗褐色を呈し、胎土には多量の砂粒を含む。



第11図 男里遺跡99—9区
出土の土器

第11節 99—10区の調査

1. 位置（第1・8図）

調査地は、現在の男里集落の南部分、双子池を上池と下池に分け男里集落内を通る所謂「信長街道」に比定されている道路の南に面する。地形的には、男里川右岸の沖積段丘面もしくは自然堤防上に立地しているものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・10）

盛土（約15cm）、旧建物解体時の黒色盛土（約10cm）、さらに近世～近代に整地を行ったと考えられる赤褐色シルト（約10cm）、黒灰色砂質シルト（約15cm）、灰褐色砂質シルト（約10cm）、黄褐色粘性シルト（約10cm）等が確認される。これらを除去すると、極暗褐色（約5cm）、暗褐色（約15cm）等の

粘性シルト層を介在し、暗褐色砂礫層に至る。暗褐色粘性シルト層上面では、乾痕が看取される。遺構は、検出されなかった。遺物は、暗褐色粘性シルトから土師器、須恵器が少量出土している。

- 註 ① 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』（1999）
② (財)大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』（1985）
③ 泉南市教育委員会「男里遺跡95—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』（1996）
④ 泉南市教育委員会「男里遺跡96—6・7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIV』（1997）
⑤ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
00—9区。2000年度の泉南市教育委員会による調査。現在整理中。
⑥ ③と同じ。
⑦ ⑤と同じ。
⑧ 遺跡南東部の弥生時代中期の集落が確認されている地点。1982年度の泉南市教育委員会による調査。
⑨ ⑥と同じ。
⑩ 泉南市史編纂委員会「原始の泉南」『泉南市史 通史編』（1987）
(財)大阪府埋蔵文化財協会・(財)大阪府文化財調査研究センターによる府道新設に伴う調査。
⑪ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』（1997）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』（1997）
⑫ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』（1997）
⑬ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
⑭ 98—6区。1998年度の泉南市教育委員会による調査。
⑮ 泉南市教育委員会「男里遺跡92—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X』（1993）
⑯ 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1987）。現在、市立雄信小学校に移設。
⑰ 泉南市教育委員会「男里遺跡96—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIV』（1997）
⑱ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
⑲ ⑪と同じ。
⑳ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』（1997）
㉑ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1993）
泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
泉南市教育委員会「男里遺跡95—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』（1996）
㉒ 泉南市教育委員会「男里遺跡55—1区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（1981）
㉓ (財)大阪府埋蔵文化財協会・(財)大阪府文化財調査研究センターによる府道新設に伴う調査。
㉔ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第35回）資料』（財)大阪府文化財調査研究センター（1997）
㉕ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1993）
㉖ 泉南市教育委員会「男里遺跡97—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』（1998）
泉南市教育委員会「光平寺跡97—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVI』（1999）
㉗ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅴ』（2000）
㉘ 本書掲載の00—3区の調査区。
㉙ 泉南市教育委員会「男里遺跡95—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』（1996）
泉南市教育委員会「男里遺跡96—6・7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIV』（1997）
㉚ 泉南市教育委員会「男里遺跡96—17区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』（1998）
㉛ 泉南市教育委員会「98—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVI』（1999）

第3章 幡代遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第12図）

幡代遺跡は、市域の西端を画する金熊寺川右岸に位置する。現在、遺跡の西半には幡代集落が位置し、東半は耕作地として利用されている。遺跡の東半にひろがる耕作地には、条里型土地割が今も残り、坪名が小字化している箇所もみられる^①。遺跡が立地する範囲の地形分類は、沖積段丘にあたる。

以下に既往の発掘調査の成果を時代ごとにみていくこととする。

これまでの調査は、現在の幡代集落内と、集落の東側の耕作地でおこ

なわれているが、主なものとして遺跡を南北に縦断する府道新設、同じく集落を東西に横断する市道拡幅に伴うものがあげられる。これらの調査では、隣接する幡代南遺跡において弥生時代中期の土器が河道の埋土から確認^②されているものの、幡代遺跡にあたる箇所では中世の掘立柱建物や土坑、溝^③などが多数確認されており、これまで検出されている遺構や遺物の主な年代は中世以降を中心としている。このように現在確認されている遺構のおもな年代は中世以降であり、中世における集落は現在の集落より東寄りに位置していたものと考えられる。

近世以降の遺構や遺物は現在の幡代集落内で数多く確認されている。このうち、製糖に用いられたと考えられる「瓦漏^④」や、瓦を転用した土製円板や泥面子^⑤など、近世における生業や日常生活等を示す興味深い遺物も確認されている。

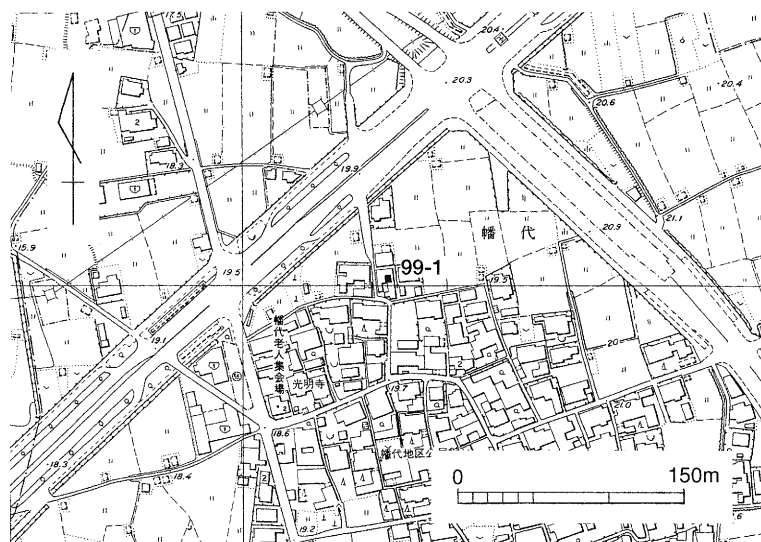
第2節 99—1区の調査

1. 位置（第12・13図）

調査区は遺跡の北西縁からやや中央より、現在の幡代集落の北縁部にあたる。地形分類上は金熊寺川右岸に発達した沖積段丘面に属する。調査区の現況は休耕田であるが、一部について滋味土が除去され、盛土が施されていた。トレンチは1カ所設定した。

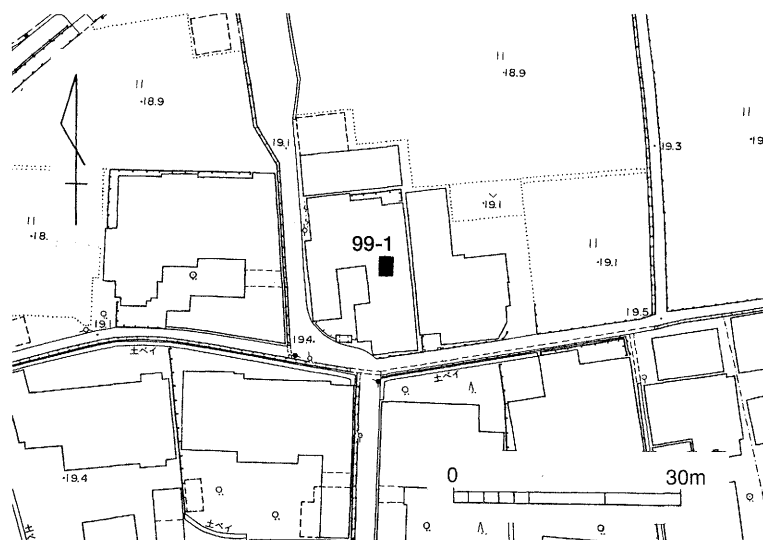
2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・10）

約20cmの盛土及び現代の滋味土を除去すると、僅かに床土である淡黄橙色土が残る部分を除いて、トレンチの北半部では近代の導水管の堀方埋土である灰褐色混じり淡黄褐色粘質土が地山である淡褐色土にまで至っている。最も厚い部分で約90cmを測る。さらに導水管の周囲には、導水管を囲むように淡黄



第12図 幡代遺跡調査区位置図

灰色粘土が認められる。逆にトレンチの南半部ではこの堀方埋土を切って設けられた野井戸が存在し、その埋土である淡灰褐色混じり黄橙色土や黄橙色混じり暗灰褐色シルト、暗灰褐色混じり黄橙色シルト、淡青灰色粘土などが認められる。これらのうち埋土最下層にあたる淡青灰色粘土より近代の所産となる瓦片が出土した。地山は淡褐色土よりなるが、導水管と落ち込みによって大きく削られているものと考えられ、また野井戸の底部付近では滞水によって生じた還元作用により土質も変化している。地山面において野井戸および導水管を確認した。



第13図 幡代遺跡99-1区地形図

3. 遺構（P.L. 4・10）

野井戸は、本来ならば盛土直下より確認されるべきものであるが、述べてきたようにトレンチのほとんど全ての箇所が何らかの改変を受けており、地山面に到達するまで導水管と区別されるものとは認識されなかったものである。よって以下に述べるのも主に野井戸の底部付近の状況である。トレンチの南西隅において確認され、さらにトレンチ外へとひろがるために全容は明らかでないが、長辺1.2m以上、短辺0.8m以上、確認面からの深さ0.5mを測る隅丸長方形を呈するものと考えられる。断面形状は滋味土直下からほぼ直線的に掘り込まれ平坦な底部へといたるやや口の開いたコップ状を呈する。断面観察によると最大幅1.2m、最大深度1.5mを測る。埋土は先に述べたように4層であり、最下層には近代の瓦片を含む。また埋土のうち淡灰褐色混じり黄橙色土は滋味土と床土の攪拌層と捉えることのできるもので、野井戸廃棄に際しては、周辺の土を用いて一気に埋め立てた様子が伺える。

導水管は煉瓦質のいわゆる土管を連結して構築されており、トレンチ内では東南東方向より西南西方向へと直線的に敷設されている。導水管の堀方より遺物は出土しなかったが、煉瓦質の土管を用いていること、また周辺での聞き取りによると近代に施行されたものと考えて間違いないだろう。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会「古代の泉南」『泉南市史 通史編』（1987）
 ② 1993年度の（財）大阪府埋蔵文化財協会の調査。
 ③ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
 1993年度の（財）大阪府埋蔵文化財協会の調査。
 ④ 泉南市教育委員会「幡代遺跡97-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
 ⑤ 泉南市教育委員会「幡代遺跡94-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）

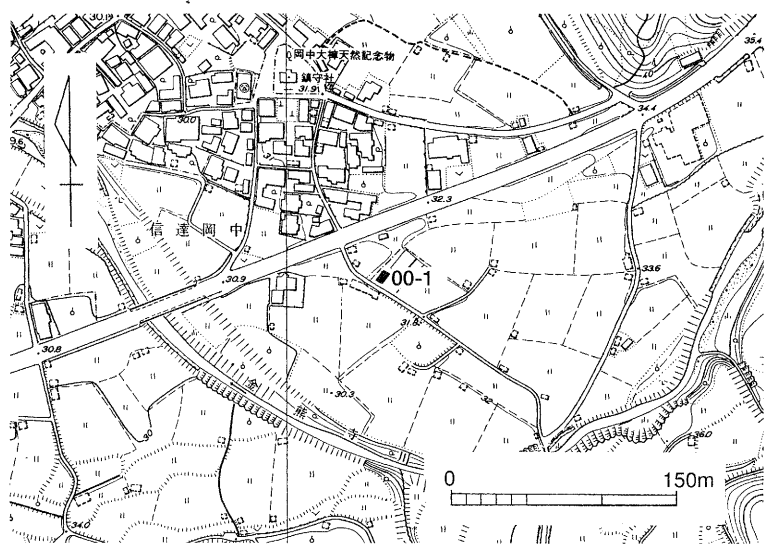
第4章 岡中遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第14図）

岡中遺跡は、市域の西端を画する金熊寺川右岸に位置する。現在、遺跡の北西部は岡中集落が位置し、南東部は耕作地として利用されている。地形分類では沖積段丘にあたる。なお、岡中集落の中央を北東から南西に縦断する道は、熊野街道に比定されており^①、集落内には府指定天然記念物である樹齢数百年の楠と榎がある。

これまでに数多くの調査がおこなわれているが、周辺遺跡の調査成果と併せみると、本遺跡の形成は中世

以降と考えられる。遺跡の北西、現在の岡中集落において、平安時代末頃創建の寺院跡^②や、室町時代の土壙墓、鍛冶関連施設^③などが確認されている。この寺院跡に関連する周辺遺跡として、遺跡の北東約100mに位置する林昌寺瓦窯^④があげられる。竹林開墾に伴い発見されたもので、露頭した焼成室の断面のみの調査ではあるが、平安時代末頃の複弁蓮華紋軒丸瓦などがみついている。また、金熊寺川の対岸で遺跡の南西に位置する岡中西遺跡では、室町時代の耕作地の排水施設と考えられる石組み遺構の他に、井戸より呪符がみついている^⑤。



第14図 岡中遺跡調査区位置図

第2節 00—1区の調査

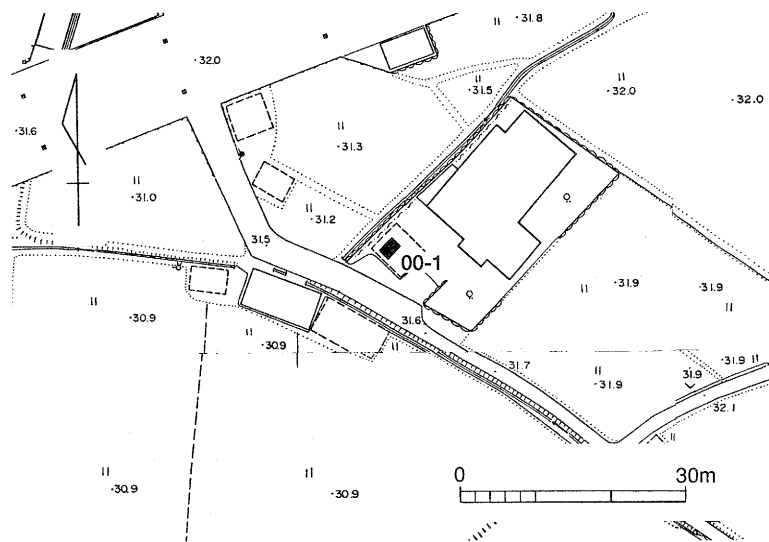
1. 位置（第14・15図）

調査区は遺跡の南端部、やや西寄りに位置している。府天然記念物に指定されている「岡中の大樟と榎」から南東へ約150mの地点であり、現在の岡中集落の南端を走る府道大阪和泉南線より約20m南へ下ったところにある。周辺での調査例は多くないが、本調査区の北西約50m、現集落の南端付近において数回の調査が実施されている。それらの調査では複数の耕作面が確認されており、中世に遡りうる可能性も指摘されている^⑥。地形分類上は沖積段丘に属するが、先の調査などでは氾濫原が確認されており、周辺にはかなりの微地形が隠されていることが明らかになりつつある。調査区の現況は更地であった。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・10）

最大で約30cmの盛土を除去すると現代の床土である暗橙色混じり淡灰褐色粘質土（約10cm）および、

暗灰黄色土（約10～20cm）がそれぞれ水平堆積をみせる。続いて淡黄褐色砂質土（約10～30cm）が暗灰褐色礫混じり土（約20～40cm）を被覆するように堆積しているが、トレンチの北半部では暗灰褐色礫混じり土の直下に再び淡黄褐色砂質土が堆積しているところもあり、規則的な堆積をみせない。これらは整地層と捉えられるものである。以下には淡褐色砂礫が一面に拡がり、確認面より約50cm掘り下げても状況は変わらないことから氾濫原の一部を構成するものと考えられる。



第15図 岡中遺跡00-1区地形図

の確認された氾濫原は西から東に向かって若干窪み、その標高は30.8～31.0mを測る。先の調査においても同様の氾濫原が確認されており、周辺には比較的広範に氾濫原が拡がっていることが明らかとなった。同時にそれらの調査区は南北方向に縦に連なっていることから、それは金熊寺川旧河道である可能性も考えられよう。

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道 論考編 一歴史の道調査報告書第1集一』（1987）
 ② 1988年度の泉南市教育委員会による調査。
 ③ 1987年度の泉南市教育委員会による調査。
 ④ 泉南市教育委員会「林昌寺瓦窯」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
 ⑤ 泉南市教育委員会「岡中西遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
 ⑥ 泉南市教育委員会「岡中遺跡94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
 泉南市教育委員会「岡中遺跡97-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・11）

表土（1層・約20cm）を除去すると、黒褐色シルト（2層・約20cm）、灰白色粘土混じり明黄褐色粗砂（3層・約100cm～）にいたる。2層は旧表土、3層は無遺物層だと考えられる。このうち、3層の上面で遺構検出をおこなったが、遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道 論考編 一歴史の道調査報告書第1集一』（1987）
② 泉南市教育委員会「北野遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
③ 泉南市教育委員会「55-7区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（1981）
④ 泉南市教育委員会「北野遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』（2000）

第6章 仏性寺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第19図）

仏性寺跡は、檜井川と新家川の合流地点の南西に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。現在の大苗代集落の北側に位置し、近年宅地化が進んでいるが、いまだそのほとんどが耕作地として利用されている。遺跡内には「薬師堂」や「大門」などの小字名が残る^①。また遺跡の南側を、北東から南西に縦断する道は熊野街道に比定されている。

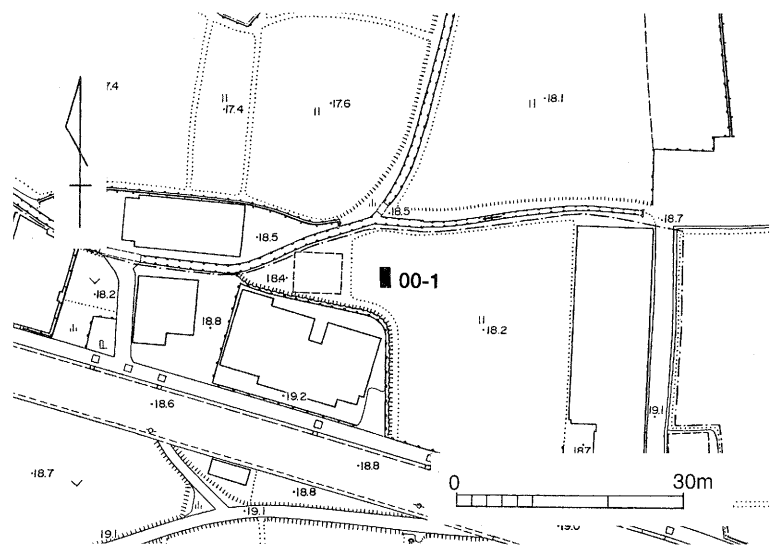
仏性寺跡は、これまでの調査成果から中世以降近世にかけて存在したと考えられる。以下、関連する調査成果をみていくこととする。遺跡の北西部における調査で、遺構面が2面確認されている^②。それぞれの遺構面で土坑が確認されており、このうち上面の直上包含層からは青白磁片が確認されている。遺跡の西部における調査では、近世の暗渠や中世の石組み遺構などとともに、包含層から巴紋軒丸瓦や唐草紋軒平瓦などが確認されている^③。遺跡の中央部では、中世の包含層が確認されているほか^④、明確な時期は不明ではあるが整地層が確認されている^⑤。一方、遺跡の東部では、旧耕作土のみで整地層および瓦類などの寺院に関連するであろう遺構および遺物は確認されなかった。このように仏性寺跡の明確な寺院遺構は確認されていないものの、その位置が想定し得るような調査成果がこれまで得られており、今後の調査が期待される。

第2節 00—1区の調査

1. 位置（第18・19図）

調査地は遺跡のほぼ中心部、市道赤井神社線に南面した地点である。調査区の南西には87—1区が隣接しており、その成果では近世および中世に属する二時期の遺構面が確認され、特に中世のものとして、寺院附属庭園とも考えられる落ち込みや配石遺構などが確認されている^⑥。

地形分類上は低位段丘上に属する。現況は休耕田であり、トレンチは1カ所設定した。



第18図 仏性寺遺跡00—1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 4・11)

確認された層序はいずれもほぼ水平堆積をみせる。まず現代の滋味土である灰黒色土（約10cm）および、床土である燈色混じり淡灰褐色土（約10cm）を除去すると、明橙色混じり淡灰褐色粘質土（約30cm）



第19図 仏性寺跡・坊主池遺跡・中小路西遺跡調査区位置図

が現れる。同層は橙色粘土のブロックと淡灰褐色土が緩やかに互層をなすもので、その堆積状況から耕作に伴う盛土と考えられるものである。つづいて旧耕作土である淡灰褐色粘質土（約25cm）が認められ、土師器や瓦質土器など、極細片ではあるが中世を中心とした遺物を含んでいる。

以下には粘性の強い淡灰色粘土（約35cm）がひろがっており、続いて淡白灰色砂（約15cm）にいたる。どちらも瓦の細片が多く出土し、また砂層からは湧水が激しかった。更に下層にはクサリレキを多量に含む暗灰色砂質土がひろがっている。同層は比較的安定しており、確認面から約50cm程掘削しても変化が認められないことから地山であると認定されるものである。地山の状況としては隣接する87—1区とほぼ共通のものと考えてよいだろう。

これら確認された層位のうち、淡灰褐色粘質土層以下の各層の上面において精査をおこなったが、遺構は全く確認されなかった。併せて地山直上に堆積している2層については、人為的な堆積によるものではなく、自然堆積によるものと捉えられることから、当調査区は中世期には湿地または沼地状であったため、土地利用はあまり活発にはおこなわれなかった可能性がある。

- 註 ① 泉南市教育委員会「仏性寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）
 ② 泉南市教育委員会「55—8区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（1981）
 ③ ①と同じ。
 ④ 泉南市教育委員会「仏性寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）
 ⑤ 泉南市教育委員会「仏性寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』（1993）
 ⑥ ①と同じ。

第7章 氏の松遺跡の調査

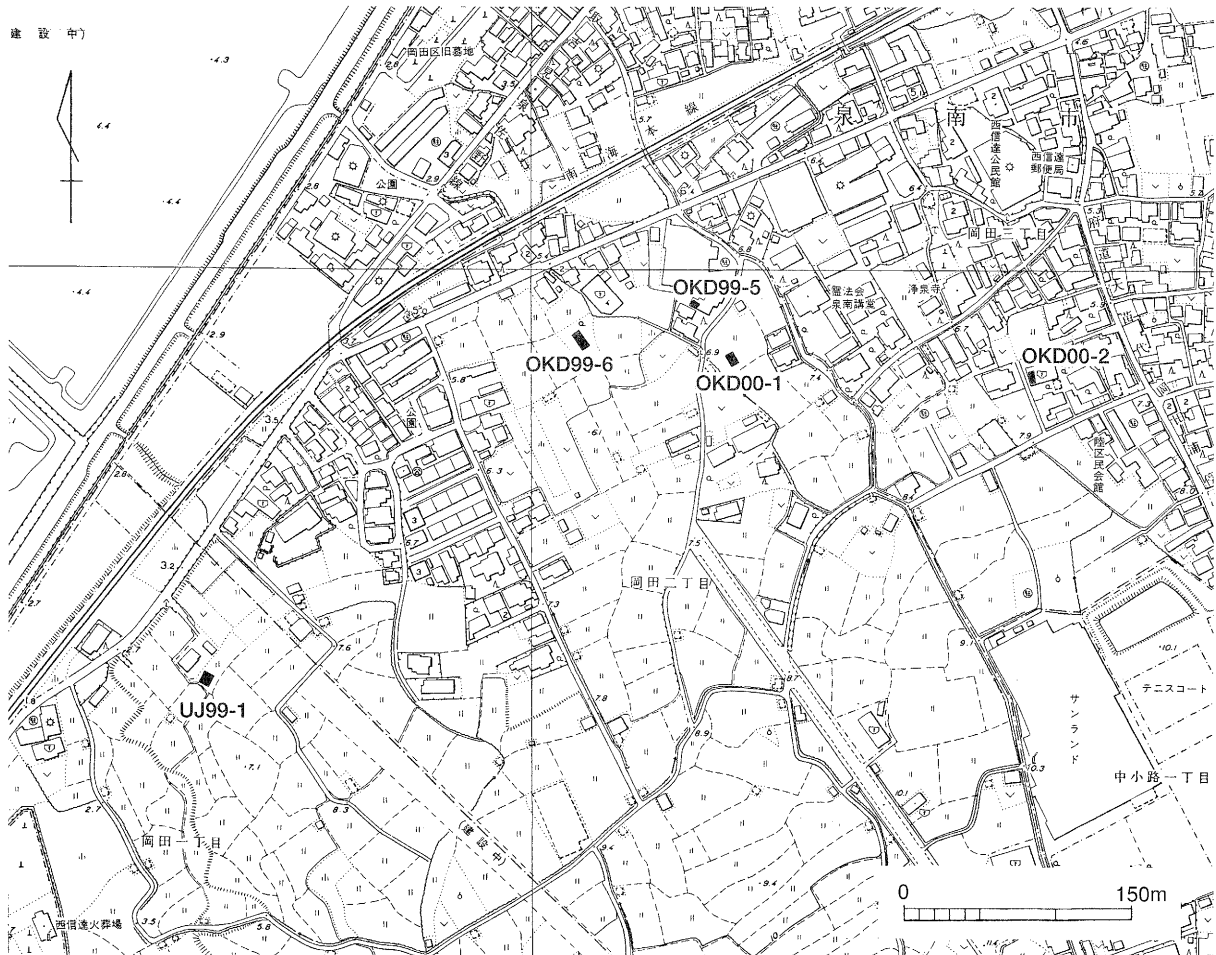
第1節 既往の調査（P L. 1・2、第20図）

氏の松遺跡は、樫井川左岸の段丘に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。現在、遺跡の中央を南北に市道が縦断している他は、その大半が耕作地として利用されている。

これまでのおもな調査例として、市道新設に伴う発掘調査があげられる^①。この調査は、遺跡の中央を南北に縦断するもので、北側では弥生時代前期の集落跡が、南側では中世の耕作痕や灌漑水路が確認された。

弥生時代前期の集落は、りんくうタウンの埋立がおこなわれる以前の海岸線から80mの地点に位置する。周辺の微地形をみると、集落が標高8mほどの微高地に位置し、その南西および北東を谷地形がとりまく。この微高地と谷地形とは約2m程の比高差がある。集落は掘立柱建物で構成され、棟持柱を伴うものもみられる。前期中段階の土器が伴い、突帯紋土器は確認されていない。確認された弥生時代前期の甕は、口縁端部からやや下がる位置に刻目がほどこされた突帯がつくものである。

中世の遺構は耕作痕、灌漑水路、井戸などが確認されている。これらの耕作に関連する遺構は、おおむね12世紀から14世紀のもの、14世紀末以降のものにわけられる。溝や井戸などの灌漑関連の遺構の



第20図 岡田遺跡・氏の松遺跡調査区位置図

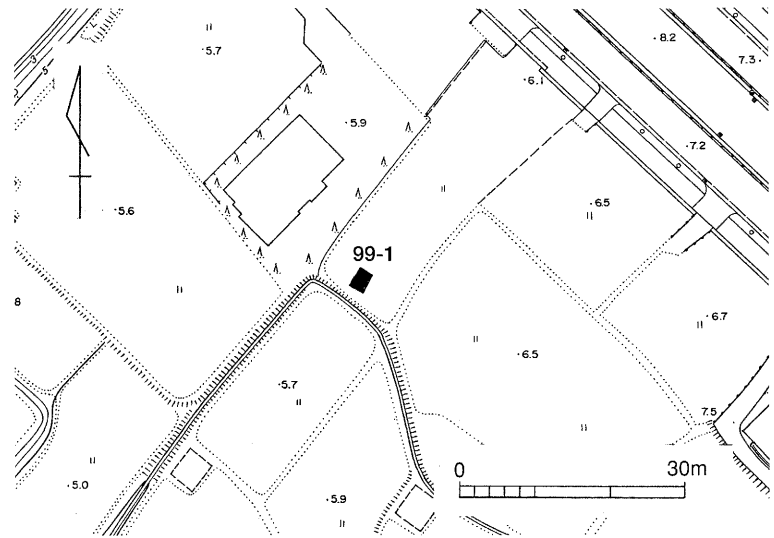
変遷をみると、12世紀から14世紀代にかけて大規模な灌漑水路が掘削され機能していたと考えられるが、14世紀末以降になると灌漑水路は埋没しそれにかわって井戸がみられるようになる。12世紀代における灌漑水路掘削による段丘面の開発のはじまりと、それ以降の灌漑施設の変遷を示すもので、中世における段丘面の開発過程とその変遷を考えるうえで興味深い資料といえる。

第2節 99—1区の調査

1. 位置 (第20・21図)

調査地は、遺跡の北西端に位置し、遺跡を南北に貫く市道市場岡田線が府道布施屋貝塚線と交差する側道に接している。弥生集落の確認された地点からは、北西に約80mほど離れており、標高は約2m低くなっている。

地形的には、段丘面の先端部分に立地しているものと考えられ、調査地から北西約50mには、府道に沿って比高差約3mの段丘崖が存在する。



第21図 氏の松遺跡99—1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・11)

盛土(約25cm)、現代の滋味土、床土である黒色、黒灰色砂質シルト(約20cm)の下層は、すぐに黄褐色粘性シルトの地山にいたる。遺物は、出土しなかった。

3. 遺構 (P L. 5・11)

トレンチ東2/3で土坑状の落ち込みを確認した。遺構の肩はまっすぐに検出され、なだらかに落ち込んでいる。深さ約35cmを測り、底面は平坦である。埋土は褐灰色、灰褐色等の砂質シルトの水平堆積で、地山をブロック状に含んでいる層もある。遺構すべてがトレンチ外に伸びるため形状は不明であるが、市道調査時においても多く検出されている近代の粘土採掘坑と考えられる。遺物は、出土しなかった。

註 ① 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)

第8章 岡田遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第20図）

岡田遺跡は、樫井川左岸の下流域に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。現在、遺跡の北東に岡田集落の一部が含まれるほかは、その大半が耕作地として利用されている。岡田集落は、岡田浦とも呼ばれ、近世には漁業および廻船業でにぎわったとされる^①。

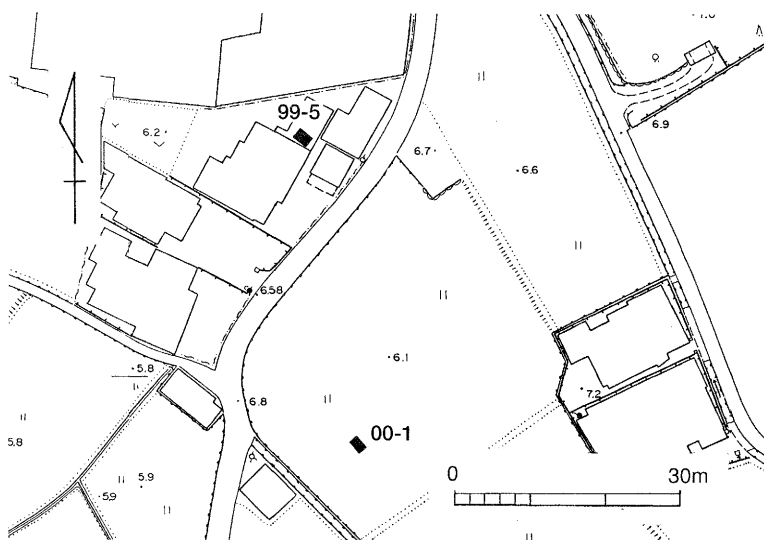
過去の調査では、弥生時代以前の石鏃^②や、平安時代以前の須恵器などのほかは、基本的には中世以降のものが確認されている。現在の岡田集落内における調査では、中世の掘立柱建物と考えられる柱穴^④などのほか、中世末から近世初頭にかけての瓦が出土した土坑が確認されている^⑤。現在耕作地として利用されている範囲では、おもに旧耕作土層で構成される複数の遺構面およびその直下の層位をベースとして耕作痕などの遺構が確認されている。これらの耕作地の開発がはじまった年代は、南西に隣接する氏の松遺跡などで検出された灌漑水路の掘削年代^⑥から、12世紀代以降と考えられる。また興味深いものとしては、近代の煉瓦生産に伴う粘土採掘坑^⑦などもみられる。

このように、これまで確認されている調査成果と現在の景観とに大きな差異はなく、遺跡の範囲内の土地の利用形態は基本的には中世以降において大幅な変化はないものと考えられる。樫井川左岸の下流域における中世以前の集落域は、弥生時代前期の集落跡が確認された氏の松遺跡^⑧や、弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡が確認された岡田東遺跡^⑨など近隣の遺跡に求めるべきであろう。

第2節 00—1区の調査

1. 位置（第20・22図）

調査区は、遺跡の北西部で、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。造成される以前は、耕作地として利用されていた。近年、調査区周辺での調査がおこなわれているが、^⑩近代の煉瓦造りに伴う粘土取りのため、旧耕作土以下は削平されている箇所が多い。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第22図 岡田遺跡00—1区、99—5区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

（P L. 5・12）

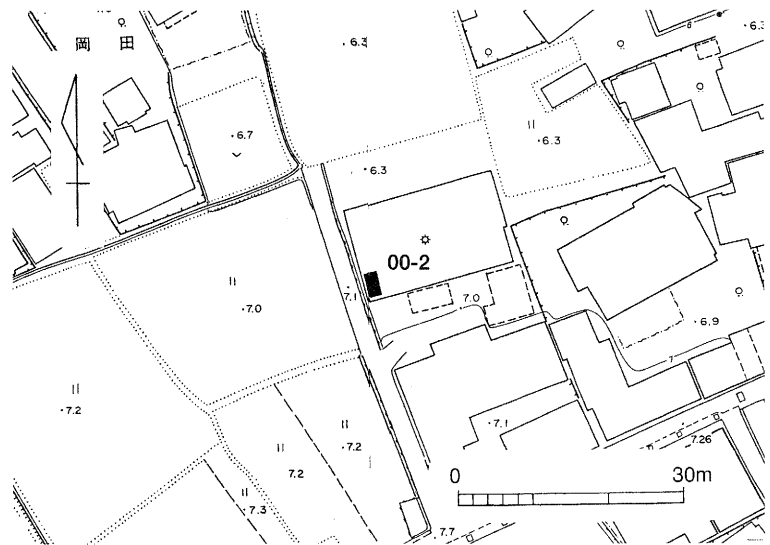
宅地造成に伴う盛土（1層・約100cm）を除去すると、明黄色粘土ブロック混じり暗褐色シルト（2層・約30cm）、明黄色粘土（3層・約25cm～）にいたる。2層は現代耕土層、3層は煉瓦造りの粘土として利用された土層と考えられる。2層直

下において、遺跡南西部で一般的にみられる旧耕作土層がないことから、調査区は近代の粘土取りのため削平されたと考えられる。このうち、3層の上面で遺構検出をおこなったが、遺構は確認されなかった。

第3節 00—2区の調査

1. 位置 (第20・23図)

調査地は岡田遺跡の中央やや北東部に位置する。周辺は当遺跡内においても個人住宅等に伴う小規模な調査が比較的集中しておこなわれている地域である。調査地の南側隣接地においては、中世の掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴が検出されており、^①当該期の集落のひろがりを示すデータが得られている。



第23図 岡田遺跡00—2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 5・12)

層序は、第1層・盛土 (約50cm)、第2層・暗灰色土 (約20cm)、第3層・灰色土 (約5cm)、第4層が地山の明黄褐色粘質土と続く。断面の観察であるが、地山上面から切り込む落ち込みが確認できた。埋土は淡灰色土で、遺物の出土はないが比較的新しいものと考えられる。粘土質な地山や周辺の調査成果から、粘土採掘坑の可能性が指摘できる。

第4節 99—5区の調査

1. 位置 (第20・22図)

調査区は、遺跡の北方、現在の岡田集落の西はずれに位置する。近年、遺跡北方の住宅地および、農地で調査件数が増加しており、広範囲に近世から近代における粘土採掘坑が確認されている。昨年度報告分の99-3区トレンチからは、北西に15mの地点に位置する。地形的には、榎井川左岸の低位段丘面上に立地するものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・12)

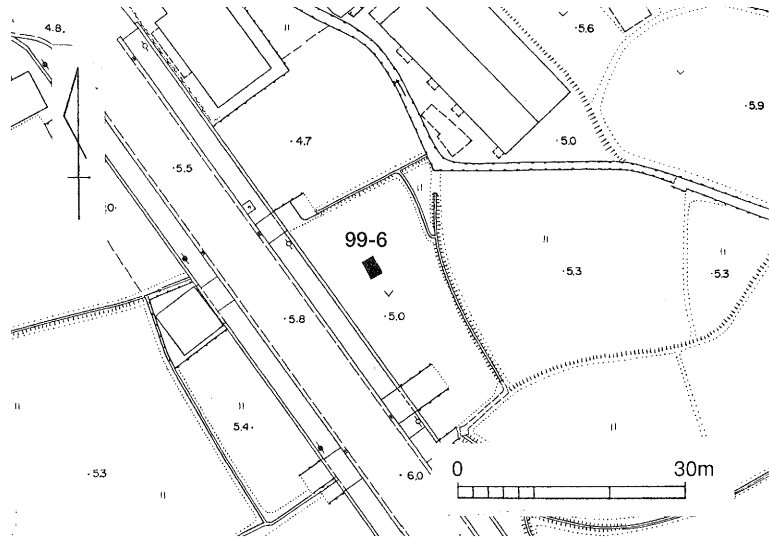
層位は、近隣における調査とは若干異なりやや明瞭な層位の変化が認められた。盛土および旧滋味土 (約40cm)、現代の床土である褐色砂質シルト (約10cm) の下層には、明褐色砂質シルト (約15cm)、褐灰色砂質シルト (約10cm)、褐色粘性シルト (約5cm)、暗黄褐色粘性シルト (約10cm) 等のかなり薄い旧耕作土と考えられる層が数層確認される。地山の直上には、黒褐色、暗褐色の粘性土が約10cm

にわたって確認される。ブロック状を呈しており、人為的な整地状の地層と考えられる。地山は、黄褐色のクサリレキを多く含んだ粘性シルトであった。遺構、遺物は確認されなかった。

第5節 99—6区の調査

1. 位置（第20・24図）

調査区は遺跡の北端部、やや中央よりに位置し、市道中小路岡田線に西面する。周辺では中小路岡田線敷設に伴う調査の他、市道を挟んだ正面約20mの地点では99—4区の調査などが行われ、周辺は粘土採掘により、大規模に削平されていることが明らかとなっている^⑫。地形分類上は低位段丘面に属する。トレンチは1カ所設定した。



第24図 岡田遺跡99—6区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 5・13)

現代の滋味土である灰黒色土（約20cm）および床土である暗橙色混じり灰色土（約15cm）の下には灰色混じり淡褐色砂質土（約40cm）がひろがっている。直下に地山である黄灰色礫混じり粘土がひろがることから、粘土採掘後、再び耕地とするために搬入された整地層と捉えられる。遺構や遺物は確認されなかった。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会「第3章 交通と産業」『泉南市史 通史編』（1987）
 ② 泉南市教育委員会「岡田遺跡90—3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）
 ③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡90—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）
 ④ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97—1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1992）
 ⑤ 泉南市教育委員会「岡田遺跡90—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）
 ⑥ 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』（1995）
 ⑦ 1996年に実施された市道新設に伴う調査。
 ⑧ ⑥と同じ。
 ⑨ 泉南市教育委員会「岡田東遺跡91—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
 石橋広和「弥生時代終末期における和泉南部地域の集落遺跡の変化」『古代』第99号 早稲田大学考古学研究会（1995）
 ⑩ 泉南市教育委員会「岡田遺跡99—3・98—3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』（2000）
 ⑪ 泉南市教育委員会「岡田遺跡96—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
 ⑫ 1994年度、泉南市教育委員会の発掘調査による。
 泉南市教育委員会「岡田遺跡99—4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』（2000）

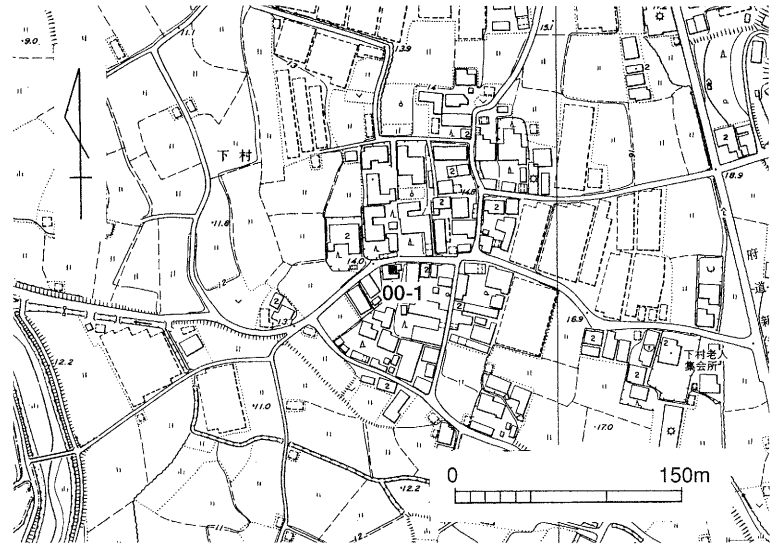
第9章 下村遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第25図）

下村遺跡は、新家川右岸に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。現在、遺跡東半には下村集落が位置し、西半は耕作地として利用されている。

本遺跡における調査は本件で3例目で、市内の他の遺跡と比べると調査例は少ない。

これまでの調査では、中世の柱穴と近世のカマド^①や、弥生時代中期の土坑、中世の掘立柱建物、近世および近代の土坑などが確認されている。



第25図 下村遺跡調査区位置図

このように本遺跡は数少ない調査例にもかかわらず、断続的ではあるものの弥生時代以降の遺構や遺物が確認されている。市内における古代以前の遺跡の分布は、市域の東西を画する男里川と樫井川の両河川下流域に集中する傾向がみられるが、特に新家川流域は当該時期における遺跡の分布が密な地域である。周辺の遺跡では、弥生時代では対岸の新家川左岸に位置する向井山遺跡で中期の方形周溝墓^③、東側の丘陵上に位置する新家オドリ山遺跡で後期の集落^④が確認されている。古墳時代では、東側の丘陵上に新家古墳群、フキアゲ山古墳などが点在している^⑤。また、中世の新家谷に関する古文書である『日輪山青明寺代々記并三谷古記』^⑥が伝わり、中世の耕地開発および村落形成を、発掘調査の成果以外からも伺い知ることができる。周辺遺跡での調査成果と対比することで、小河川流域での土地利用および集落の変遷過程があとづけでき、今後の調査成果が期待される。

第2節 00—1区の調査

1. 位置（第25・26図）

調査区は、下村遺跡の中央部で地形分類では沖積段丘にあたり、現在の下村集落の南西端に位置する。なお調査区の北東約30mでおこなわれた調査では、弥生時代中期や中世の遺物、遺構が確認されている^⑦。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 5・13）

盛土（1層・約140cm）を除去すると、礫混じり黄褐色粗砂（2層）にいたる。このうち、2層は基盤層と考えられる。盛土である1層直下に旧表土が残っていないことから、盛土に伴う削平が2層まで及んで

第10章 フキアゲ山東遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第28図）

フキアゲ山東遺跡は、新家川と櫛井川に挟まれた南北にのびる丘陵上の標高40m付近に位置し、地形分類では洪積段丘高位面および丘陵にあたる。現在は宅地開発などにより造成され、原地形を残す箇所は少ない。

本遺跡では、市立小学校の建設に伴い、発掘調査がおこなわれている^①。この調査では、縄紋時代前期の土器や、弥生時代の大型蛤刃石斧が見つかったほか、2基の古墳が確認されている。調査対象となったフキアゲ山1号墳は、直径15mの円墳で5世紀後半のものとされる。主体部は木棺直葬で、須恵器や碧玉製管玉などが出土している。

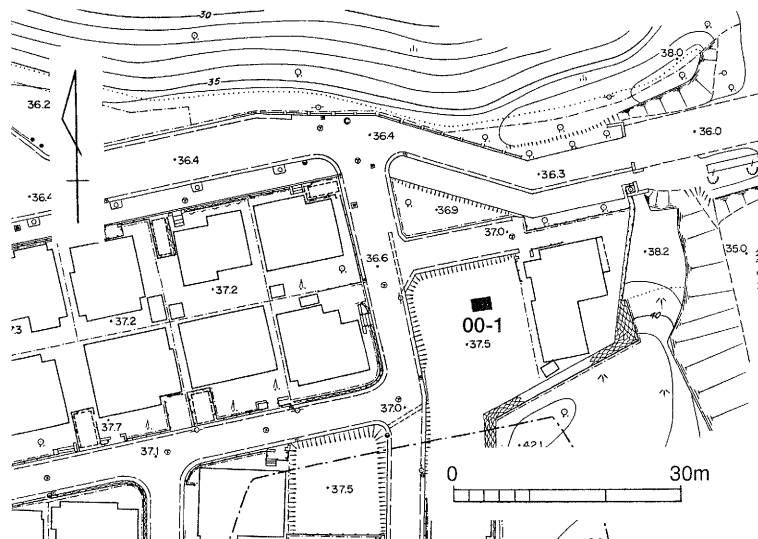
周囲の遺跡をみると、古墳では兎田古墳群や新家古墳群などが同一丘陵上に点在しているほか、弥生時代後期の集落が確認された新家オドリ山遺跡が位置する^②。これらの遺跡が点在する丘陵上は、宅地開発などで造成され原地形をとどめる範囲がすくないものの、削平をまぬがれた箇所では遺構や遺物の発見される可能性は高く、今後の調査が期待される。

第2節 00—1区の調査

1. 位置（第27・28図）

調査区は、遺跡の中央部で地形分類では洪積段丘高位面および丘陵に位置する。本遺跡の範囲内に含まれるフキアゲ山1号墳の南西約50mの地点にあたる。

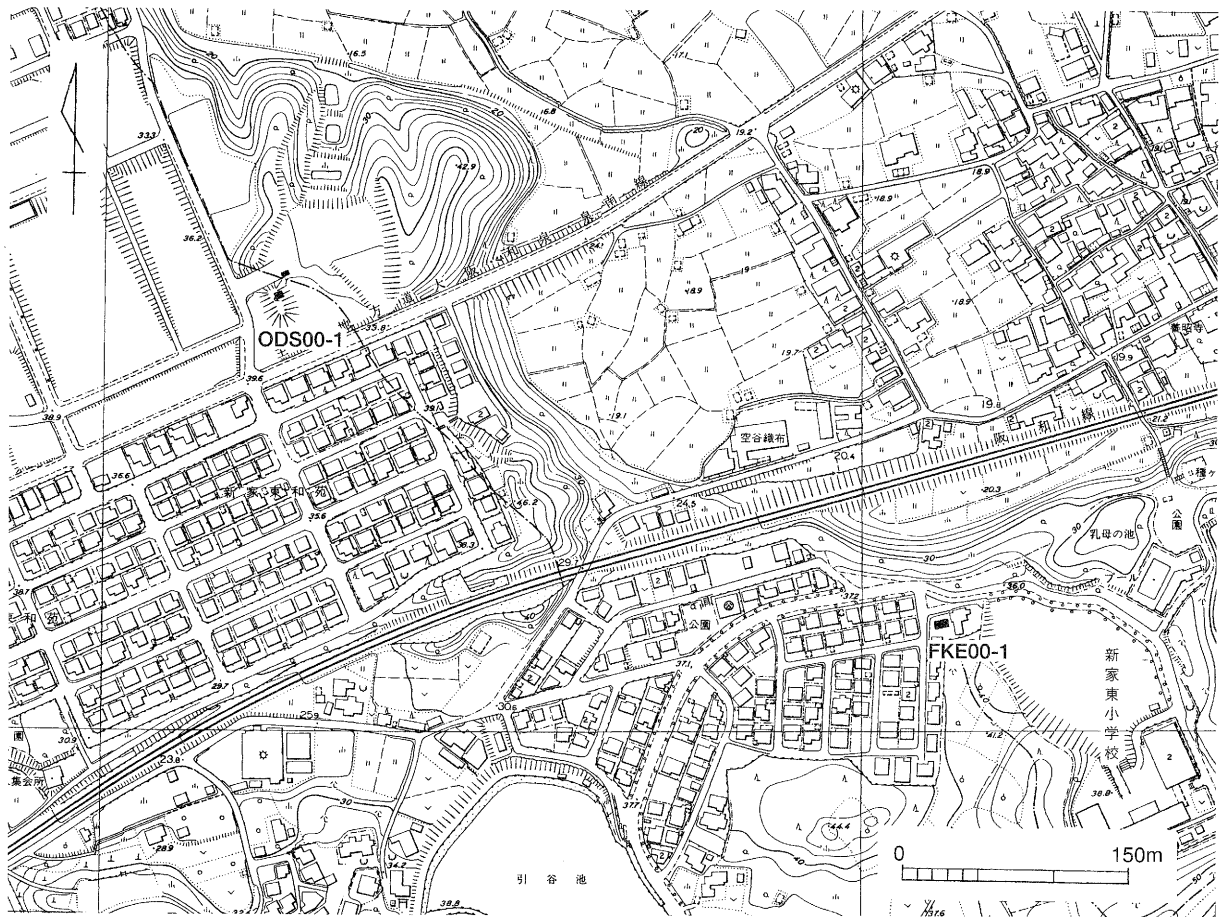
遺跡の位置する丘陵上は、住宅地の造成により原地形が改変されている箇所が多いものの、調査区付近は丘陵の頂部で北東側には谷地形がひらけており、原地形の残されている可能性が想定できる箇所である。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第27図 フキアゲ山東遺跡00—1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 5・13）

表土（1層・約15cm）を除去すると、褐灰色細砂と橙色細砂が互層に堆積している層（2層・約50cm～）にいたる。1層は宅地造成に伴う盛土、2層は基盤層と考えられる。1層直下に旧表土がみられないことから、宅地造成による削平が2層まで及んだものと考えられ、原地形自体が削平されている可能性が高



第27図 フキアゲ山東遺跡・新家オドリ山南遺跡調査区位置図

い。このうち、2層の上面で遺構検出をおこなったが、遺構は確認されず遺物も出土しなかった。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会「原始の泉南」『泉南市史 通史編』（1987）
 ② ①に同じ。

第11章 まとめ

平成12年度の文化財保護法に基づいた埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、第1表に示したとおり、平成12年12月31日現在で29件を数える。本書で報告するのは、平成11年1月1日から平成12年12月31日までの、個人住宅建設などに伴う発掘調査の成果である。

各遺跡における内訳は、第2表に示したとおり男里遺跡10件、幡代遺跡1件、岡中遺跡1件、中小路西遺跡1件、坊主池遺跡2件、北野遺跡1件、仏性寺跡1件、氏の松遺跡1件、岡田遺跡4件、下村遺跡1件、フキアゲ山東遺跡1件、新家オドリ山南遺跡1件である。このうち、前年度における発掘調査のうち未報告分は、男里遺跡2件（99—9・10区）、幡代遺跡1件（99—1区）、氏の松遺跡1件（99—1区）、岡田遺跡2件（99—5・6区）である。

以下、今回報告する調査成果とこれまでの調査成果を比較することで本書のまとめとしたい。

男里遺跡では10件の調査成果を報告している。遺跡の北東部および、中央部の双子池東側、そして西部の男里集落付近での調査であった。

はじめに遺跡中央の双子池東側における調査からみていくこととする。00—1区では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構面を確認した。この遺構面直上にみられる暗褐色系の粘土層は、遺跡の中央部、現在の男里集落と馬場集落の間の耕作地、地形分類では自然堤防の部分を除いた氾濫原及び谷底低地、旧河道、沖積段丘の一部にあたる箇所にはひろく堆積がみられる。遺跡のほぼ全域でこの層位をベースとして遺構が確認されているが、北東部において平安時代の掘立柱建物が確認されている箇所が一部あるものの、そのほかでは中世以降の耕作痕などの遺構が確認されている。このことから、暗褐色系の粘土層はおおむね中世以前の堆積と考えられる。

この暗褐色系の粘土層がみられる範囲は、中世以前に湿地状であったことを示すものと考えられ、当時は大規模な灌漑施設を敷設せずとも容易に耕地化が可能な環境といえる。このため、この層位が分布する範囲において中世をさかのぼる時期の水田などの生産域が存在する可能性が考えられる。さらに、暗褐色系の粘土層の直下で確認される遺構の時期は遺跡内でも調査した地点によって若干時期差がみられることから、各時期における水田などの生産域の限定がおこないうる可能性が指摘できる。これまでの調査では、調査区の北約200mに位置する95—1区で縄文時代晩期の遺構面^③、同じく北西約300mの00—9区で弥生時代中期前葉の遺構面、調査区の東約100mに位置する95—2区で飛鳥時代の掘立柱建物や^④ 竪穴住居が確認されていることから、この層位の堆積が始まった時期は遺跡内でも地点によって異なると考えられる。おそらく、遺跡中央にみられる旧河道が、頻繁に川幅が増減し蛇行を繰り返すような不安定な河道であったことに起因するものであろう。このように遺跡内各所における暗褐色粘土直下の遺構面の帰属時期を把握することは、それ以前の時期における生産域を限定する重要な根拠といえる。

また、00—1区で確認した遺構面は、弥生時代終末期から古墳時代初頭のものであるが、調査区周辺で同時期のものと考えられる遺構面のひろがりも確認されている。大阪府教育委員会による双子池下池の堤体改修に伴う一連の調査のうち、1996年の調査では安定した遺構面と大溝が^⑤、1999年の調査では柱穴などの遺構が^⑥ 確認されている。これらの双子池下池の堤体東半において確認された遺構面は、直上の黒褐色土層が削平されている箇所はあるものの、今回の調査で確認されたものとはほぼ同時期であると考えられ、当該時期の集落域の範囲が双子池下池東側付近と推定できる。

00—1区の東側50mに位置する00—4区では、旧耕作土直下の層位から須恵器などがみつまっている。調査区の東20mに位置する96—1区では飛鳥時代の掘立柱建物^⑦などが確認されており、今回の調査では遺構は確認できなかったが、旧耕作土直下の層位がこれとほぼ同時期のものであることから、調査区周辺における当該時期の遺構のひろがりが見込める。

このように、遺跡の中央部、特に双子池東側においては、弥生時代終末期から古墳時代初頭および古代の集落域の存在が確認されつつある。また、双子池西側から男里集落南東において、古代の集落域の存在が見込める。今後、各時期における集落域の検出および集落範囲のさらなる限定が期待される。

次に遺跡の北東部における調査をみていくこととする。99—9区は遺跡北部における調査である。河川堆積を呈する層位が確認され、縄紋土器が出土した。周辺では、南西約50mの地点で滋賀里Ⅲ式、同じく約80mの00—9区では滋賀里Ⅳ式、南約100mでは船橋式から長原式の土器群^⑧がそれぞれ確認されており、縄紋時代晩期の遺構群のひろがりが見込める地点である。今回の調査地は、河川埋土からの出土であるが、周辺に当該時期の遺構群が存在する可能性が高まったといえる。

00—2区では、遺構および遺物が確認されていないものの、中世以前の耕作地など生産域を推定する上で貴重な成果が得られた。今回の調査で確認した旧耕作土層直下の3層は、遺跡北東部にひろくみられる層位で少なくとも中世以前の堆積であると考えられる。その直下でシルト質の土層が確認されているが、調査区より東側になると、旧耕作土直下には礫層がみられ東にいくほどレベルをあげていく。つまり今回の調査区より東は耕作地としては不向きな地域と考えられる。このことから、中世をさかのぼる時期の水田などの生産域が、本調査区から男里集落の東端までに存在する可能性が高いと考えられる。また、近接する00—3区では、旧耕作土直下で河川の氾濫作用に起因する層位を確認した。この土層は、直上の層位から出土した土器から、少なくとも中世以前の堆積と考えられる。このことから調査区付近が地形的に安定するのは中世以降であろう。

このように、遺跡の北東部においては、縄紋時代の遺構群のひろがりが見込めず、その確認が課題といえる。また双子池北側、地形分類でいう旧河道縁辺は、中世以前において湿地状を呈していたと考えられ、中世以前の水田などの生産域の存在が見込める。

最後に遺跡の西部、男里集落付近における調査をみていくこととする。00—5区および00—6区は、現在の男里集落の南西端での調査である。付近には近世以降、男里川に設置された霞堤が存在していたとされる。このうち00—5区では、近世以降の整地層が確認され、その直下は河川の氾濫作用による堆積状況を呈していた。この近世以降の整地層は、調査区の西約30mの98—2区^⑩や、近接する93—6区^⑪でも確認されている。一方、00—6区では、同様の整地層は明確には確認されず、旧耕作土直下は河川堆積であった。これらの調査成果は、近世以降の整地の範囲を示す資料といえよう。

00—7区は、光平寺跡の北西に隣接する地点での調査である。調査では、2カ所のトレンチ双方で基盤層と考えられる礫層が、南西方向にむかってレベルを下げていることが確認された。また、男里川寄りの第1トレンチではこの基盤層の直上に河川堆積を呈する土層がみられ、付近が男里川の氾濫作用に影響を受けた箇所であったことが確認された。ただし、これより東側になると安定した地形であったようである。調査区の東約20mの55—1区では、鎌倉時代の掘立柱建物^⑫が確認されており、このことから調査区の東側に位置する現在の男里集落、地形分類で自然堤防にあたる箇所では、中世以降安定した地盤がひろがっていたと考えられ、今回の調査で確認された河川堆積は、中世以降の集落域の西端を示すも

のといえる。

00—8区および99—10区は、現在の男里集落内での調査である。このうち00—8区では表土直下において、近世以降のカマドを検出した。数cm単位に土層をつきかためてつくられたもので、廃棄後人為的に埋め戻されて整地されている。近世以降の男里集落の変遷を考えるうえで興味深い成果といえる。また99—10区では、近世以降の整地土が確認されている。その直下の土層で土師器および須恵器の小片が確認されている。調査区東約30mでは奈良時代および平安時代の掘立柱建物^⑬などが確認されており、今回の調査区付近まで当該時期の遺構の存在が想定できる。

このように遺跡西部の男里集落付近では、中世以降の集落の存在が想定できる。男里集落内での調査における遺構の把握はもちろんのこと、現在の男里集落縁辺の調査により各時期の集落域の限定が可能であり、今後の調査が期待できる。

幡代遺跡では、遺跡北部の幡代集落内での調査であった。野井戸などを確認した。遺物が出土せず帰属時期は不明ではあるがおそらく近世以降のものと考えられる。遺跡東半においては掘立柱建物や耕作痕など、中世以前の資料が得られているものの、現在の幡代集落内での調査例は少ないなか、現在の景観が形成される過程を示す貴重な資料が得られたといえる。

岡中遺跡では遺跡の南端部における調査であった。金熊寺川の氾濫作用に起因すると考えられる層位を確認した。調査区は岡中集落の外れに位置し、護岸が施されるなど金熊寺川の流が安定する以前は、不安定な土地であったことが想定できる。

北野遺跡では、遺跡の南東部における調査であった。付近は宅地造成により原地形の改変を受けているものの、昭和30年代までは調査区付近は小高い丘陵が存在していた。今回の調査区では、完全に削平されていたため遺構や遺物は確認できなかったが、調査区南東約30mには7世紀半ば創建の海会寺跡が位置し、付近を熊野街道がとおる。周辺にはこれらに関連する施設が遺存している可能性が指摘でき、今後の調査が期待できる。

仏性寺跡では、これまでの調査成果から遺構の存在が期待できる地点での調査であった。付近では明確な寺院関連施設は確認されていないものの、中世の石組み遺構や軒瓦^⑭、整地層^⑮などが確認されており、その成果が期待されたが、旧耕作土より下層において湿地状の自然堆積が確認され、若干の瓦が出土したのみであった。今回の調査では寺院に関連する施設は確認できなかったが、寺域の限定をおこなううえで、今回の調査成果は有意義なものといえる。

氏の松遺跡における調査は、段丘上に位置する弥生時代前期の集落域^⑯から80m程北西にあたり、2mほどレベルを下げる。旧耕作土直下の遺構面では近代以降の粘土採掘坑を確認した。岡田遺跡の南西部を含めて、付近ではこのような粘土採掘坑が確認されている。今回報告する岡田遺跡においても同様の遺構が確認されており、市内における近代産業史の解明に有効な考古資料といえよう。

岡田遺跡では遺跡南西部における調査であった。いずれも旧耕作土直下において近代の粘土採掘坑と考えられる痕跡が確認されている。近隣における聞き取りによると、煉瓦造りに伴う粘土取りは、20世紀初頭に盛んにおこなわれていたもので、耕作地の床土直下の黄褐色粘土層を採掘していたそうである。

下村遺跡では遺跡南西部、現在の下村集落内における調査であった。弥生時代中期や中世の遺構が確認された95—1区^⑰の南東約20mの地点で、同様の調査成果が期待されたが、表土直下は盛土であり遺構および遺物は一切確認できなかった。遺跡の現況をみると、下村集落内はこれまで中世以前の遺構が遺

存していることが確認された地点よりもレベルを下けているが、今回の調査成果から、現在の集落形成に伴い予想以上に削平を受けている箇所が多い可能性も考えられる。

フキアゲ山東遺跡では遺跡の中央における調査であった。遺跡が位置する丘陵上には、フキアゲ山古墳、新家古墳などの墳墓群のほか、新家オドリ山遺跡など集落跡も確認されているものの、宅地造成により大幅に削平されている。今回の調査区は、完全に削平を受けていたが、付近にこれらの遺構群が遺存する可能性も捨てきれない。現況と対比しつつ遺構が遺存する可能性が考えられる箇所においては、今後も確認が必要であろう。

以上、最新の調査成果をもとに、今回報告した各遺跡の様相について概観してきた。発掘調査の成果により、市内における地区単位での歴史の変遷、市内もしくは泉南地域における産業史など、多角的な視点から見た歴史像が素描できる。関連諸分野の成果を併せみること、さらに豊かな歴史像が描くことができる。長年の調査成果の蓄積により、それが可能な遺跡および視点も存在する。今後も調査成果の積み上げと、その解釈および認識の再検討、再構築が必要である。

- 註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡95—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』（1996）
② 府道新設に伴う1996年の（財）大阪府埋蔵文化財協会の調査による。
③ 泉南市教育委員会「男里遺跡95—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』（1996）
④ 泉南市教育委員会「男里遺跡96—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIV』（1997）
⑤ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』（1997）
⑥ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・V』（2000）
⑦ ④と同じ。
⑧ 泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No1』（1995）
⑨ ③と同じ。
⑩ 泉南市教育委員会「男里遺跡98—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVI』（1999）
⑪ 泉南市教育委員会「男里遺跡93—6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XI』
⑫ 泉南市教育委員会「男里遺跡55—1区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書II』（1981）
⑬ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
⑭ 泉南市教育委員会「仏性寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』（1988）
⑮ 泉南市教育委員会「仏性寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書VII』（1990）
⑯ 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』（1995）
⑰ 泉南市教育委員会「下村遺跡95—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』（1996）

第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	樫井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	総福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兎田遺跡	186	林昌寺銅鐸出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	190	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兎田古墳群	190	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸日遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東門寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禪興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	ダイジョウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	雨山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	座頭池遺跡	158	石ヶ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	岡田西遺跡	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	本田池遺跡	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	中小路西遺跡	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	中小路遺跡	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須恵器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	北野遺跡	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレット遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	仏性寺跡	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚原遺跡	126	海宮宮池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	男里遺跡	219	三味谷遺跡
36	俵屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樽井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本麿寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山南遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	樫井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		

SENNANSHI-ISEKIGUN-HAKKUTUTYŌSA-HOUKOKUSYO XVIII

SENNANSHI-BUNKAZAI-TYŌSA-HOUKOKUSYO VOL.34

A Report on Archaeological Resarch at Sennan city in 2000

C o n t e n t s

Prehace

Chapter 1 Prosess of Reserch Work	1
2 Research of ONOSATO site	6
3 Research of HATASHIRO site	17
4 Research of OKANAKA site	19
5 Research of KITANO site	21
6 Research of The Rnuin of BUSSYŌJI Temple	23
7 Research of UJINOMATU site	25
8 Research of OKADA site	27
9 Research of SHIMOMURA site	30
10 Research of FUKIAGEYAMA-HIGASHI site	32

Abstract of Report

Plates

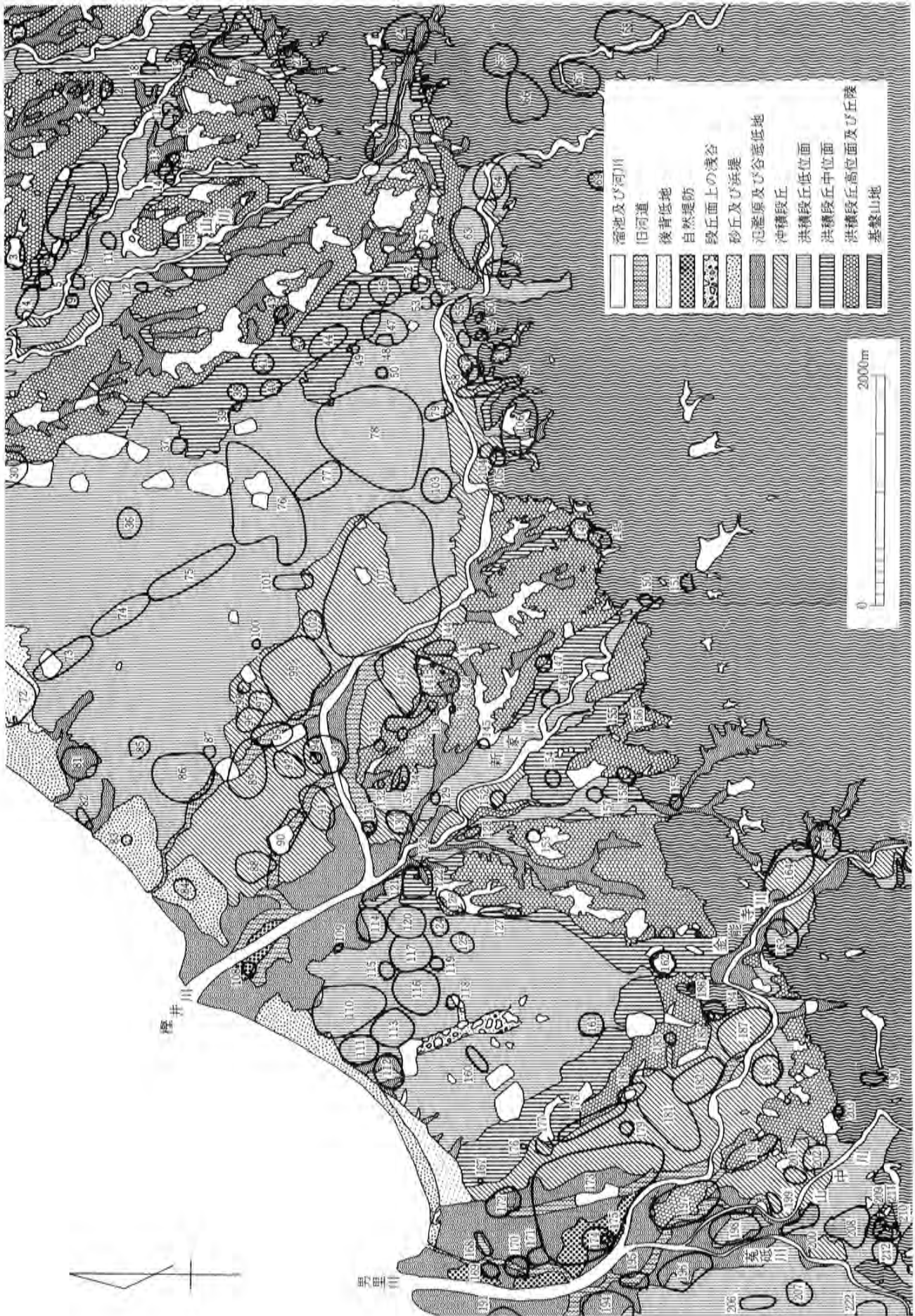
Sennan Municipal Board of Education,

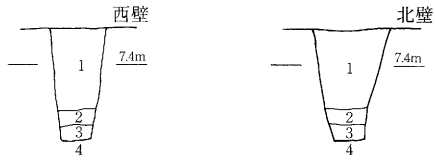
Osaka,Japan.

MARCH, 2001

圖 版

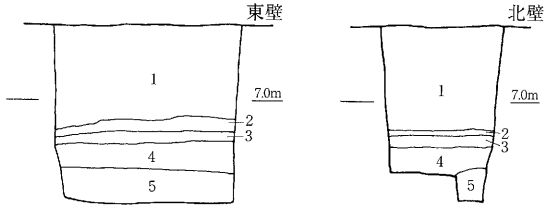






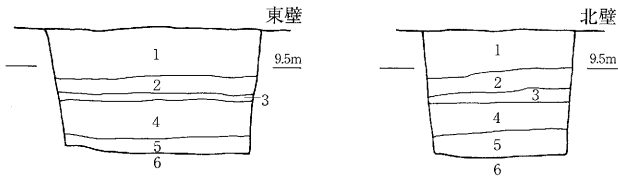
1. 盛土
2. 暗灰色シルト
3. 黄灰色シルト
4. 灰褐色シルト

ON00—2区断面図



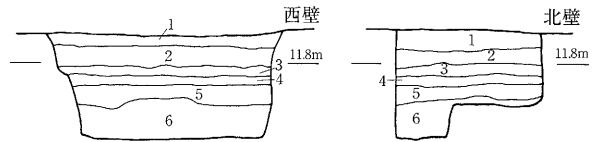
1. 盛土
2. 暗灰色シルト
3. 明褐色シルト
4. 茶褐色シルト
5. 灰色粗砂混じり礫 (5~15cm大)

ON00—3区断面図



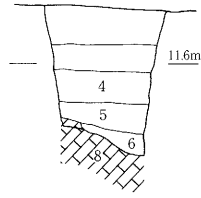
1. 黄褐色シルト
2. 黒褐色シルト
3. マンガン混じり黄灰褐色シルト
4. 礫混じり灰色シルト
5. 褐灰色シルト
6. 礫混じり灰色シルト (10~15cm大)

ON00—5区断面図



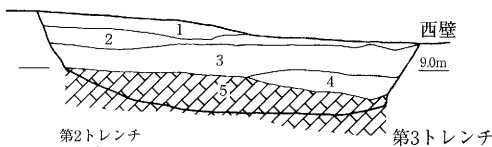
1. 灰黒色土
2. 暗褐色混じり淡灰褐色砂質土
3. 暗褐色混じり淡灰褐色砂質土
4. 淡灰褐色混じり暗褐色砂質シルト
5. 暗褐色礫混じりシルト
6. にぶい暗黄褐色礫混じり土

ON00—4区断面図

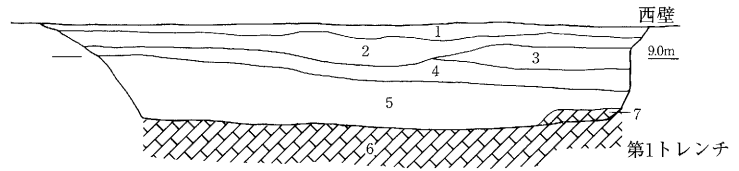


1. 灰色シルト
2. 暗褐色混じり淡灰褐色土
3. 淡灰褐色混じり橙色砂質土
4. 暗褐色混じり淡褐色土
5. クサリ礫混じり暗褐色粘質土
6. 暗黄褐色粘質土
7. 暗褐色混じり淡褐色土
8. 暗黄褐色粘質土
9. 灰白色粘質土に暗褐色粘質土がブロック状に混入

ON00—1区平面図及び断面図

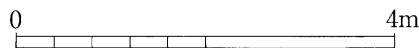


- 第2トレンチ
1. 滋味土
 2. 赤褐色シルト
 3. 明褐色砂質シルト
 4. 褐色礫 (粗砂混入)
 5. 褐色粗砂
 6. 暗褐色粗砂
 7. 明褐色粘土
 8. 暗褐色礫
- 第3トレンチ
1. 滋味土
 2. 赤褐色シルト
 3. 明褐色砂質シルト
 4. 礫混じり明褐色砂質シルト
 5. 暗褐色礫



- 第1トレンチ
1. 滋味土
 2. 明褐色砂質シルト
 3. 明褐色粘性シルト
 4. 褐色粘性シルト (礫多量混入)
 5. 明褐色粗砂
 6. 褐色礫
 7. 明褐色粘土

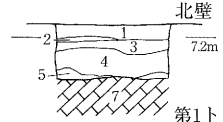
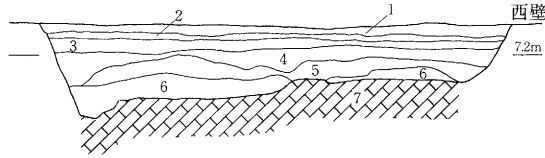
ON00—6区断面図



PL. 4 男里遺跡②・幡代遺跡・岡中遺跡・北野遺跡・仏性寺跡調査区

第1トレンチ

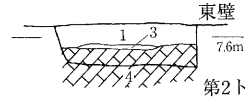
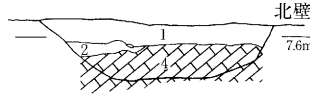
1. 淡灰色土
2. 褐灰白色土
3. 淡黄灰褐色土
4. 褐色混じり淡灰褐色砂質土
5. 淡褐色礫混じり土 (3~20cm大)
6. 淡黄褐色砂
7. 暗褐色礫混じり土



第1トレンチ

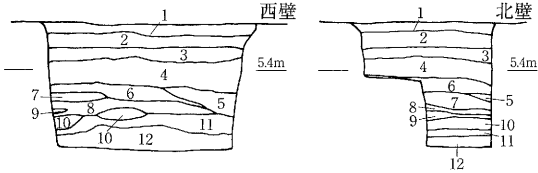
第2トレンチ

1. 灰黒色シルト
2. 淡灰褐色土に暗褐色土がブロック状に混入
3. 橙色粘土混じり灰褐色シルト
4. 暗褐色砂礫土



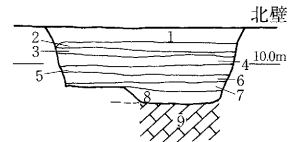
第2トレンチ

ON00—7区 断面図



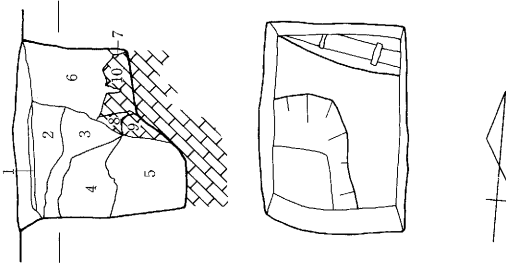
1. 淡橙色混じり淡灰褐色土
2. 黄色混じり淡灰褐色土
3. 淡黄褐色粘質土
4. 橙色混じり暗灰褐色シルト
5. 暗灰黒色粘土
6. 暗灰褐色混じり明黄色砂礫
7. 橙色混じり明灰褐色砂
8. 暗淡灰褐色砂
9. 暗灰褐色混じり暗黄褐色砂
10. 暗黄褐色砂礫
11. 暗灰褐色砂礫
12. 暗灰オリブ色砂質シルト (植物遺体含)

ON99—9区断面図



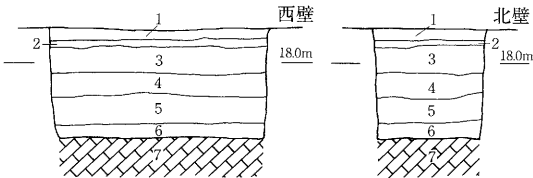
1. 表土
2. 黒色シルト
3. 赤褐色シルト
4. 黒灰色砂質シルト
5. 灰褐色砂質シルト
6. 黄褐色粘性シルト
7. 極暗褐色粘性シルト
8. 暗褐色粘性シルト
9. 暗褐色砂礫

ON99—10区 断面図



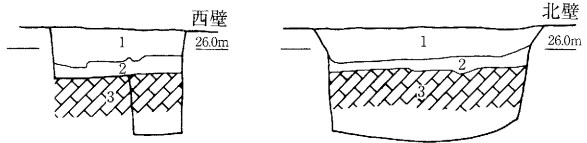
1. 淡灰黒色土
2. 淡灰褐色混じり黄橙色土
3. 黄橙色混じり暗灰褐色シルト
4. 暗灰褐色混じり黄橙色シルト
5. 淡青灰色粘土 (巨礫混じり)
6. 灰褐色混じり淡黄褐色粘質土
7. 淡黄灰色粘土
8. 淡黄白色シルト
9. 淡オリブ色粘質土
10. 淡褐色土

HT99—1区平面図及び断面図



1. 灰黒色土
2. 橙色混じり淡灰褐色土
3. 明橙色混じり淡灰褐色粘質土
4. 淡灰褐色粘質土
5. 淡灰色粘土
6. 淡白灰色砂
7. 暗灰色礫混じり砂質土

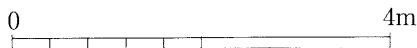
BS00—1区断面図



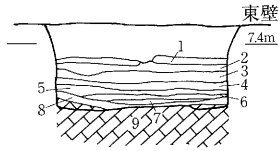
OK00—1区断面図

1. 表土
2. 黒褐色シルト
3. 灰白色粘土混じり明黄褐色粗砂

KT00—1区断面図

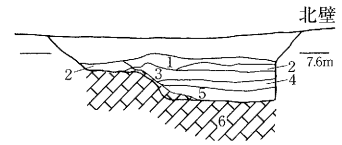


PL. 5 氏の松遺跡・岡田遺跡・下村遺跡・フキアゲ山東遺跡調査区



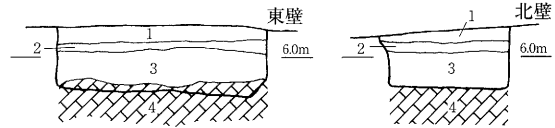
1. 褐色砂質シルト
2. 褐灰色砂質シルト
3. 明褐色砂質シルト
4. 褐灰色砂質シルト
5. 褐色粘性シルト
6. 暗黄褐色粘性シルト
7. 黒褐色粘性土
8. 暗褐色粘性土
9. クサリ礫混じり黄褐色粘性シルト

OKD99—5区断面図



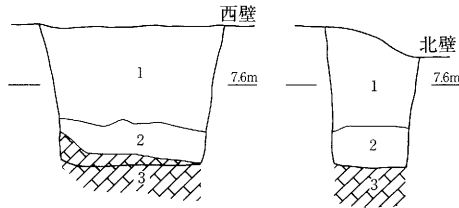
1. 滋味土
2. 黒色砂質シルト
3. 黒灰色砂質シルト
4. 灰褐色砂質シルト
5. 褐色砂質シルト
6. 黄褐色粘性シルト

UJ99—1区平面図及び断面図



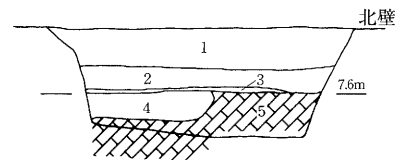
1. 灰黒色土
2. 暗褐色混じり灰色土
3. 灰色混じり淡褐色砂質土
4. 黄灰色礫混じり粘土

OKD99—6区断面図



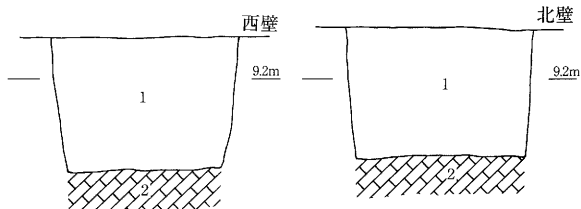
1. 盛土
2. 明黄色粘土ブロック混じり暗褐色シルト
3. 明黄色粘土

OKD00—1区断面図



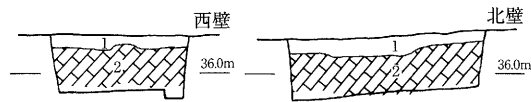
1. 表土
2. 暗灰色土
3. 灰色土
4. 淡灰色土
5. 明黄褐色粘質土

OKD00—2区断面図



1. 盛土
2. 礫混じり黄褐色細砂 (5~20cm大)

SM00—1区断面図



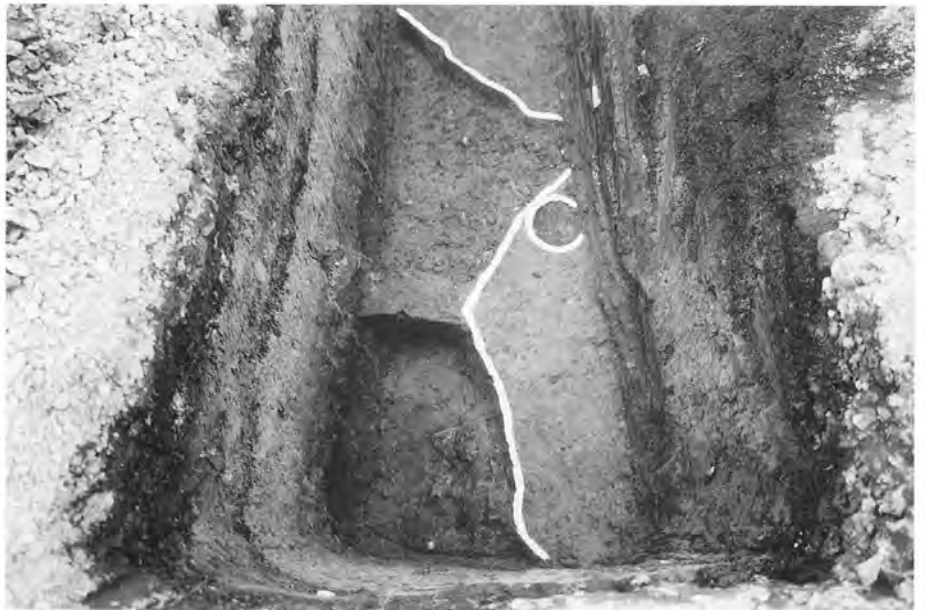
1. 表土
2. 褐灰色細砂と橙色細砂が互層に堆積

FKW00—1区断面図





00—1区全景
(南から)



同落ち込み細部
(北から)



00—2区
(南から)



00—3区
(西から)



00—4区
(南から)



00—5区
(西から)



00—6区第1トレンチ
(南から)



00—7区第1トレンチ
(南から)



00—7区第2トレンチ
(南から)



00—8区全景
(南から)



00—8区カマド
(北から)



99—9区
(南から)



ON99—10区
(西から)



HT99—1区
(北から)



OK00—1区
(東から)



KT99—1区
(南から)



BS00—1区
(南から)



UJ00—1区
(西から)

00—1区
(西から)



00—2区
(南から)



99—5区
(北から)





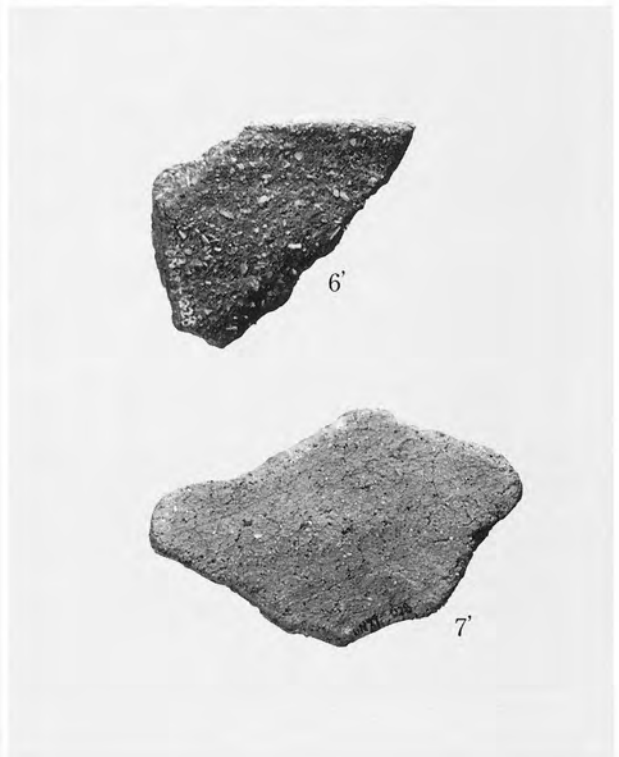
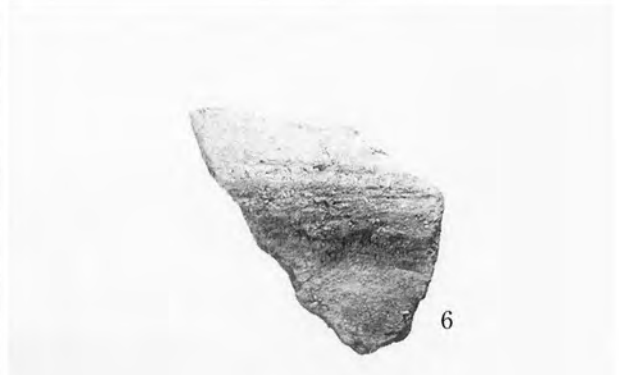
OKD99—6区
(南から)



SM00—1区
(北から)



FKE00—1区
(東から)



報告書抄録

ふりがな	せんなんしせいせきぐんはくつちようさほうこくしょ							
書名	泉南市遺跡群発掘調査 報告書							
副書名	—							
巻次	XVⅢ							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第三十四集							
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590—0592 大阪府泉南市樽井1丁目1番1号 TEL.0724—83—0001							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと 男里遺跡	おのさかふ せんなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	ON	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	00—1 2000 11	7	分譲住宅
						00—2 2000 08	2	個人住宅
						00—3 2000 08	5	個人住宅
						00—4 2000 05	5	個人住宅
						00—5 2000 08	4	倉庫・事務所付 専用住宅
						00—6 2000 04	21	宅地造成
						00—7 2000 09	11	分譲住宅
						00—8 2000 04	8	個人住宅
						99—9 2000 02	4	個人住宅
						99—10 2000 03	4	個人住宅
はたしろ 幡代遺跡	おたかふ せんなんし 大阪府泉南市 はたしろ 幡代	27228	HT	34度 21分 09秒	135度 16分 08秒	99—1 2000 03	5	個人住宅
おかなか 岡中遺跡	おたかふ せんなんし 大阪府泉南市 しんごもおかな 信達岡中	27228	OK	34度 20分 51秒	135度 16分 38秒	00—1 2000 04	5	個人住宅
きたの 北野遺跡	おたかふ せんなんし 大阪府泉南市 しんごおの 信達大苗代	27228	KT	34度 22分 22秒	135度 17分 15秒	00—1 2000 10	5	個人住宅
ぶっしょうじ 仏性寺跡	おたかふ せんなんし 大阪府泉南市 しんごいちらば 信達市場	27228	BS	34度 22分 07秒	135度 17分 07秒	00—1 2000 06	4	個人住宅
うじのまつ 氏の松遺跡	おたかふ せんなんし 大阪府泉南市 おかだ 岡田	27228	UJ	34度 22分 36秒	135度 16分 33秒	99—1 2000 03	5	個人住宅
おかだ 岡田遺跡	おたかふ せんなんし 大阪府泉南市 おかだ 岡田	27228	OKD	34度 22分 39秒	135度 16分 45秒	00—1 2000 12 00—2 2000 12 99—5 2000 01 99—6 2000 02	4 5 4 4	個人住宅 分譲住宅 個人住宅 個人住宅
しもむら 下村遺跡	おたかふ せんなんし 大阪府泉南市 しんげ 新家	27228	SM	34度 22分 25秒	135度 16分 50秒	00—1 2000 10	5	個人住宅
ふきあげやまびがし フキアゲ山東遺跡	おたかふ せんなんし 大阪府泉南市 うさいだ 兔田	27228	FKE	34度 22分 16秒	135度 18分 39秒	00—1 2000 11	4	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡 00—1 00—2 00—3 00—4 00—5 00—6 00—7 00—8 99—9 99—10	集落 集落	弥生～古墳 不明 中世 奈良 近世以降 不明 不明 近世以降 縄紋 奈良？	落ち込み、柱穴 カマド	土師器など 土師器など 須恵器・土師器など 陶磁器・瓦など 瓦 縄文土器 須恵器・土師器など	当該時期の遺構面を確認 近世以降の整地層を確認 近世以降のカマドを検出
幡代遺跡 99—1		近世以降	野井戸など		
岡中遺跡 00—1		不明			
北野遺跡 00—1		不明			
仏性寺跡 99—1		中世			
氏の松遺跡 99—1	生産	近代	粘土採掘坑		近代の煉瓦造りに伴う資料を確認
岡田遺跡 00—1 00—2 99—5 99—6	生産 生産 生産	近代 近代 近代	粘土採掘坑 粘土採掘坑 粘土採掘坑		近代の煉瓦造りに伴う資料を確認 近代の煉瓦造りに伴う資料を確認 近代の煉瓦造りに伴う資料を確認
下村遺跡 00—1		不明			
フキアゲ山東遺跡 00—1		不明			

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVIII

泉南市文化財調査報告書 第34集

2001年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井1丁目1番1号

Tel.0724-83-0001

印刷 泉南ムカイ精版印刷株式会社

